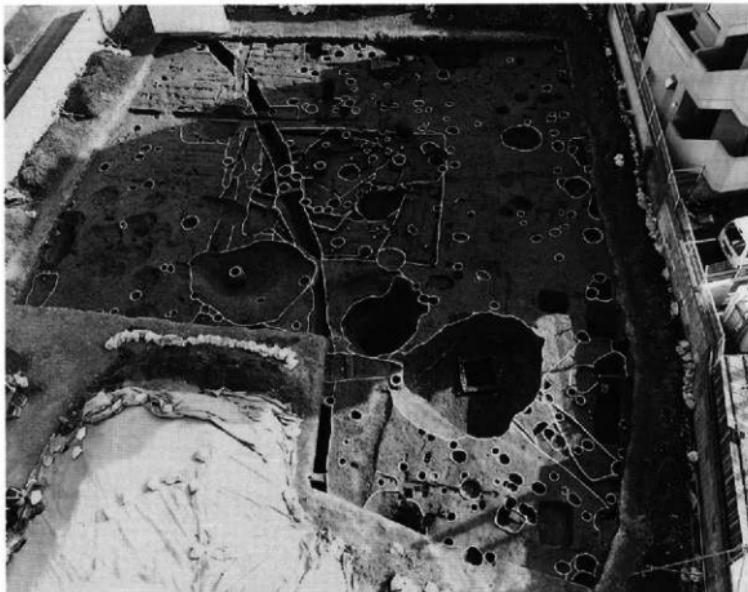


# 那珂 32

— 那珂遺跡群第73次調査の概要 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第713集



2002

福岡市教育委員会

『那珂32』福岡市埋蔵文化財調査報告書第713集 訂正箇所

・41ページ最下段



Ph. 72 Fig 39-193 (SC02)

出土遺構や層位についても記入した他、各個体の下や脇に分類名称や一部の調整について写植で表わした。土師器の壺・皿では、「糸」は糸切り底、「ヘラ」はヘラ切り底、「板」は板目圧痕を表わし、陶磁器では「龍」は龍泉窯系青磁、「白」は白磁である。なお中世の遺物については大庭康時、森本朝子、田中克子の御教示を得た部分があるほか、韓半島系瓦質土器については申敬輔、武末純一の御教示を得た。また石器・石製品について

## 序

古くから大陸文化受容の門戸として栄えてきた福岡市内には、多くの史跡や文化財が分布しています。本市では、こうした文化財の保護・活用に努めているところですが、各種の開発事業によってやむをえず失われる遺跡については、事前に発掘調査を実施し、記録保存を行っています。

本書は、博多区那珂3丁目地内に所在する那珂遺跡群内で、共同住宅建設に先だって発掘調査を実施いたしました那珂遺跡群第73次調査の報告書です。

本調査では、弥生時代から室町時代にかけての集落跡が検出され、多くの貴重な資料を得ることができました。とりわけ、鎌倉時代と考えられる大型の井戸の発見は、この地域の歴史を考える上で、非常に重要な発見であります。

本書が文化財保護へのご理解と認識を深める一助となり、また研究資料としても活用していただければ幸いであります。

最後になりましたが、発掘調査にご協力いただき、調査費用を負担して頂いた廣田熊雄氏はじめとする関係各位の方々に、感謝の意を表します。

平成14年3月29日  
福岡市教育委員会  
教育長 生田 征生

## 例 言

1. 本書は、福岡市教育委員会が、平成11(1999)年11月8日から平成12(2000)年1月12日まで発掘調査を実施した、共同住宅建設に伴う那珂遺跡群第73次調査の概要の報告書である。
2. 遺構の呼称は記号化し、構列をSA、掘立柱建物をSB、竪穴住居をSC、溝状遺構をSD、井戸をSE、土坑をSK、柱穴をSP、不明遺構ないし特殊遺構をSXとしている。
3. 本書に用いる方位は磁北である。調査区の座標は任意のものである。調査地点周囲の福岡市教育委員会設置の那珂地区国土地理院基準杭がその後の道路工事等で失われていたため、周囲の平板測量により道路台帳地図と調査区の位置を合成した。
4. 本書に用いる遺構図は、久住猛雄、本田浩二郎、坂口剛毅、瀬戸啓治、坂元雄紀、坂本真一、西堂将夫、坂田邦彦、能登原孝道、西口貴志が実測・作成した。遺物の実測は、西堂将夫、鍾ヶ江賢一、上方高弘、廣田容子、山口裕平、坂田邦彦、柳原俊行、吉留秀敏が行った。現場写真は久住が、遺物写真は久住と一部を上方が撮影した。製図は、成清直子、上方、廣田、柳原、鍾ヶ江、久住が行った。本書の編集と執筆は、一部刷石器については吉留秀敏が執筆したが、他は久住が行った。また編集の一部には上方高弘の助力を得た。
5. 本調査に関わる遺物・記録類(図面・写真)は、福岡市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・管理される予定である。
6. 表紙写真は調査区全景、裏表紙写真は中世大型井戸SE01の作業風景である。

## 目 次

|     |             |    |
|-----|-------------|----|
| I   | はじめに        | 1  |
| II  | 遺跡の立地と歴史的環境 | 1  |
| III | 調査の記録       | 7  |
| 1   | 調査の概要       | 7  |
| 2   | 検出遺構        | 8  |
| 3   | 出土遺物        | 34 |
| V   | おわりに        | 57 |

## I. はじめに

### 1. 調査に至る経緯

平成11(1999)年7月8日、廣田熊雄氏、廣田進氏より、博多区那珂3丁目19,20,21番における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財の事前審査願が福岡市教育委員会埋蔵文化財課に提出された。申請地は、那珂遺跡群として周知されている範囲内であり、周辺の調査成果からも弥生時代から中世までの遺構の存在が予想された。埋蔵文化財課では関係者と協議の上、平成11年9月9日に同地の試掘調査を行った。その結果、申請地からは柱穴や窓穴住居址などの遺構が検出され、周囲と同様の遺構群の存在が確認された。この試掘調査の結果をもとに、遺跡の取扱いについて関係者と協議を行った。その結果、共同住宅建設の敷地部分について、記録保存のための発掘調査を実施することになった。そして、廣田熊雄氏の受託調査として、1999年11月8日より発掘調査を開始した。発掘調査の終了は当初1月7日の予定であったが、まれにみる大型井戸SE01の掘削・精査の時間を考慮し、廣田熊雄氏の了承を得て期間を若干延長し、2000年1月12日に終了した。調査は、共同住宅中に委託者の個人住宅を含むため、費用負担の一部は国庫補助金事業となっている。なお、整理作業は2001(平成13)年度に行い、報告書を作成した。

### 2. 調査の組織

調査は以下の組織で行った。調査にあたり、調査を委託された廣田熊雄氏および現場施工担当の照栄建設株式会社村上隆行氏には、条件整備等で多くなるご協力を頂き、調査を円滑に進行することができた。ここに記して感謝申し上げたい。

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 西憲一郎(調査年度)、生田征生(整理年度)

調査総括 埋蔵文化財課 課長 山崎純男

埋蔵文化財課調査第2係長 力武卓治(調査年度)、

埋蔵文化財課調査第1係長 山口謙治(整理年度)

調査庶務 文化財整備課 宮川英彦

調査担当 埋蔵文化財課調査第1係 久住猛雄

調査作業 池田省三、大塙皓、甲斐正耕、木田ひろ子、近藤澄江、柴田常人、尊田絹代、高木美千代、田中肇、橋知子、橋良平、徳永洋二郎、中山竹雄、播磨千恵子、平井武夫、藤野幾志、村田敬子、平山栄一郎、脇田栄、石井淳子、板倉有大、金子朋子、西堂将夫、坂出邦彦、坂本真一、坂元雄紀、西口貴志、能登原孝道、瀬戸啓祐

整理作業 井上雅子、岡藤佳代子、小田恭歌、甲斐田嘉子、川鍋紀子、日下部由美子、佐々木麻実、富田輝子、成清直子、廣田容子、山口裕平、吉田浩之、上方高弘

なお、調査中にはSE01大型井戸の実測において本田浩二郎(埋蔵文化財課)のご協力を得た。またSE01井戸部材の仮収蔵と金属器の銷落としでは比佐陽一郎(埋蔵文化財センター)のご協力を得た。調査に関係された以上の方々にこの場を借りて感謝申し上げたい。

## II. 遺跡の立地と歴史的環境 (Fig. 1)

那珂遺跡群は、福岡平野の中央の御笠川と那珂川に挟まれた洪積丘陵の北端に立地する。この丘陵は、花崗岩風化礫層を基盤として、阿蘇山の火碎流による八女粘土、鳥栖ローム層が上部に堆積・形成されている。北に接する比恵遺跡群と同じ立地であるが、両遺跡の間には若干低い地形の部分があるものの、遺構の分布や時期的な展開状況からは実質的に同一の遺跡群と考えられる(田崎博之1998「福岡地方における弥生時代の土地環境の利用と開拓」「福岡平野の古環境と遺跡立地」九州大学出版会)。この範囲は、中世以降の開墾や近代以降の区画整理や都市化による地形の削平や改変が著しく、

遺構の残存状況も必ずしも良好でない場合が多い。これらを考慮した比恵・那珂遺跡群の旧地形の標高は、5~11m前後である。近年では、比恵・那珂遺跡群を南北に貫く弥生時代終末から古墳時代前期の道路状構造の存在が指摘されており（久住猛雄 1999「弥生時代終末期「道路」の検出」『九州考古学』第74号）、同一の集落遺跡としてよいだろう。この「道路」については、その後の調査でその側溝の延長が那珂 71,77,83 次の各調査で検出されている。比恵・那珂遺跡群を一つの遺跡とした場合、その範囲は南北 2.4km × 東西 0.5~0.8km となる。もちろん時期によって、遺構の展開範囲が異なっており、これをそのまま各時期の遺跡の規模とすることはできないが<sup>4</sup>、弥生時代中期末頃、古墳時代前期初頭頃、飛鳥時代前半（6世紀末～7世紀前半）の3時期に遺構分布のピークがあると考えられ、これらの時期の遺跡範囲は 100ha を超えるとみられる。この規模は、畿内の都城を除けば、日本列島における弥生時代から飛鳥時代の集落遺跡では最大級の規模であり、その重要性が理解されよう。なお、弥生時代早期から中期前半までの遺構・遺物は台地の縁辺部にあり、別々の複数の集落があったが、弥生中期中頃に台地中央部に突然集住して広大な集落を形成するようになる。

福岡平野中央部は、中国の歴史書に見える「奴国」の中心地とされ、また『日本書紀』に見える「那津」の地域とされ、これを裏付けるように、弥生時代から古墳時代、飛鳥時代の多くの重要な遺跡が分布している。特に御笠川と那珂川に挟まれた、春日丘陵から比恵・那珂遺跡群の丘陵にいたるまでの部分は、特に弥生時代を主とする遺跡が濃密に分布する（春日市教育委員会編『奴国の首都須玖岡本遺跡』吉川弘文館）。春日丘陵には、前漢鏡を30枚以上出土した「王墓」で知られる須玖岡本遺跡の臺棺を主とする墳墓群をはじめとして、その南側の丘陵部分には岡本遺跡、パンジャク遺跡、赤井手遺跡、竹ヶ本遺跡、平若遺跡、仁手下遺跡、ナライ遺跡、大南遺跡、大谷遺跡、高辻遺跡



Fig. 1 周辺の遺跡分布図 (S=1/75,000)

といった、弥生時代中期前半から終末期までの集落・墳墓群、あるいは青銅器埋納遺構が分布し、環濠ないし大溝や、手工業生産では鍛冶工房や青銅器・ガラス製品の鋳型も多数検出されている。これらの各遺跡は、丘陵尾根ごとの名字で呼称されているが、隣接遺跡との境界は不明瞭であり、環濠の想定延長や遺構の展開過程（その消長や丘陵の造成事業）などから、相互に有機的な関係を持った、事実上同一の遺跡群と捉えるべきである（仮に須玖岡本丘陵部の遺跡群とする）。その場合、南北1.8km×東西0.7kmという非常に広い大きな遺跡群となり（吉留秀敏1999「福岡平野の弥生社会」「論争 吉備 シンポジウム記録」考古学研究会）、「王墓」が存在することや、周囲に青銅器埋納遺跡が分布することから、より政治的・祭祀的なセンター機能を有する大集落と位置付けることができる（久住猛雄 2000「奴国の中核－須玖岡本遺跡群と比恵・那珂遺跡群－」「考古学から見た弁・辰韓と倭」嶺南考古学会・韓国釜山）。須玖岡本遺跡の北側の丘陵前面の低台地上には、須玖永田遺跡、須玖坂本遺跡、須玖五反田遺跡、須玖唐梨遺跡、須玖柿町遺跡、須玖尾花町遺跡などの遺跡群が径600mの範囲で分布する。弥生中期後半から遺構群があるが、盛期は後期前葉以降、弥生終末期であり、特筆すべきは、この範囲では何処を掘っても青銅器やガラス製品の鋳型や中子、取瓶などの鋳造関係遺物が多数出土することであり、まさに青銅器工業地帯ともいいくべき様相を呈する。これらは一連の遺跡群であり（仮に須玖岡本低地部の遺跡群とする）、その内部を弥生後期～終末期の直線的な溝が縱横に走る状況が想定され、日本列島最初の「都市」的な集落とする評価もある（武末純一1998「弥生環濠集落と都市」「古代史の論点」3 都市と工業と流通 小学館）。いずれにしても特殊な集落であり、弥生時代後期の「奴国」の中核と考えられる。これら低地部の遺跡群と丘陵部の遺跡群は、同時に存在し、互いに異なる機能を持った大集落として相補う形で存在している。

一方、比恵・那珂遺跡群は同様に巨大な集落であり、須玖・岡本遺跡群ほどではないが青銅器生産関係遺物が多く出土することや、縱横に溝が走行することなど類似する点も多いが、銅鏡副葬や青銅器埋納がほとんど見られない点で異なり、弥生時代においては政治的祭祀的センター性は顕著ではなく、むしろ比恵遺跡群北半に広がる高床倉庫と考えられる掘立柱建物群の存在や（比恵7・6・58・35・48次など）、弥生中期中頃に成立し中期後半まで機能した「運河」的機能を有する条溝群の存在（福岡市埋蔵文化財調査報告書第596集、比恵15次報告）などから、結節点としての交易・交通の拠点としての性格が強いと考えられる。水銀朱の原料である多量の辰砂の出土（比恵57次）など、特異な遺物の出土もみられる。那珂23次では弥生中期末の超大型建物があり、前面の大溝では丹塗土器などの多量の祭祀的な土器の廃棄がみられるが、この地区は必ずしも比恵・那珂遺跡群の中核ではなく、逆に言えば、このような大型建物は集落内に複数存在した可能性がある。比恵・那珂遺跡群の中核地区は比恵遺跡群中央東側の「環溝」群であり（鏡山猛 1956「環溝住居址論攷」「史漏」67）、弥生後期初頭（？）の1号環溝をはじめ累代の方形環溝があり、現在では類例から首長居館に類するものとされている（2号環溝は弥生終末～古墳前期）。また比恵遺跡群では井戸の検出数が非常に多く、集住と関連するものとみられる。比恵・那珂遺跡群と須玖・岡本遺跡群の間には、井戸遺跡群があり、弥生時代中期前半頃より集落の展開がみられ、近年の調査では弥生中期後半の陸橋と門柱を有する大溝が検出され、環濠集落になる可能性もある。弥生中期から後期前半までの資料は北半に多いが、弥生後期中頃～古墳前期前半の遺構・遺物は広範囲に広がり、南北1.0km×東西0.2～0.4kmの20ha以上の集落となる。銅鏡や銅鏡の鋳型も出土し、青銅器生産も行う、規模的にも拠点的な集落と言えるが、比恵・那珂遺跡群や須玖・岡本遺跡群はさらに上位に来ることが留意される。比恵・那珂遺跡群の1.5km東、御笠川の対岸には雀居遺跡があり、弥生後期中頃～終末の環濠集落は大型建物を含む掘立柱建物群を伴い、大量の土器と多様な木製品が出土している。木製品には組合せの机や、弧帶紋を有する短甲、あるいは樂浪系の青銅製馬鐐など、特異な遺物がある。首長層に關わる遺物とみられるが、

今のところ青銅器生産の証拠もなく、立地的にも農業に基盤を持ち、比恵・那珂遺跡群の傘下の集落であろう。雀居遺跡は、弥生早期（繩文時代晩期末）から古墳前期前半まで継続的に続く集落であるが（今のところ弥生中期後半から後期前半は不明）、微妙に各時期の立地を違えており、一時期の規模はそう大きくはない。比恵・那珂遺跡群の南東1.5kmには板付遺跡があり、弥生早期～弥生前期の大規模な水田を伴い、初期の環濠集落として著名である。弥生前期末ないし中期初頭の青銅器を副葬する墳丘墓の板付田端遺跡の存在や遺構・遺物の検出状況から弥生中期まで拠点的な集落であったようである。弥生中期後半には、前期の環濠を切る「T」字形の環溝があり、首長居館に採用される方形環溝の先駆けとみられる。ところが弥生後期以降は遺構の分布はやや少くなり、拠点的機能を失って一般の農村に変容し、むしろ比恵・那珂遺跡群や須次遺跡群の衛星集落的な存在となる。弥生中期後半から古墳前期の比恵・那珂遺跡群の周囲は、雀居遺跡や板付・諸岡・高畠遺跡群のような傘下の農村がある一方で、台地の際に接する低地や御笠川の対岸にも水田を經營しているようである。那珂遺跡群の東、諸岡川の対岸には那珂君体・那珂深ラサ遺跡があり、古墳時代初頭以降の広い水田がある。水田区画が特異な小区画であることが注意される。大規模な井堰や水路が検出されている。安定した水田面として存在したこと考慮すれば、上限は弥生後期に遡る可能性もある。弥生終末以前の水田面ははっきりしないが、井堰の古いものは弥生中期末ないし後期初頭である。比恵遺跡群の北端、比恵4次（瑞穂遺跡）では、弥生時代と古墳時代の水路が検出されており、前面に広がる低地部は水田として利用されている可能性が高い。比恵遺跡群の北東1km、御笠川を挟んだ東比恵3丁目遺跡では、弥生中期中頃～後期前半の広大な水田が検出されており、經營規模から比恵遺跡群との関連が考慮される。その他、那珂遺跡群の東、御笠川の対岸の東那珂遺跡の一部も弥生後期以降に水田となつたようである。なお弥生中期以降の段丘上に集住した時期の水田を段丘裾や段丘尾根間の谷水田に求める見解があるが、試掘調査のデータなどからもそのような事実は無く、また比恵4次の段丘裾の小規模な水田は生産性が低く、弥生中期以降放棄されている。やや広域を含めた周囲の広い沖積地に東比恵遺跡のような大規模な水田を開発・經營していたのだろう。また鉄器の組成から比恵・那珂遺跡群では方形板刃先や鎌の比率が他の弥生集落に比べて低く、農耕が主たる生業ではない可能性もあり、周辺の農村としての中小集落との有機的な関係を考える必要がある。

弥生時代終末新相以降になると、須次・岡本の広大な遺跡群は衰退し、遺構数は激減する。これと交替するように、比恵・那珂遺跡群の遺構分布は若干増大し、先述の「道路」の造営を一つの軸として新たな集落の再編成が行われた。このような動きの中で福岡平野最古の前方後円墳である那珂八幡古墳が那珂遺跡群の中央に築造され、「奴国」の政治的センターは比恵・那珂遺跡群に移動したと考えられる。方形周溝墓群の造営も開始される。「奴国」の中核が海に近い北側に移動したと同時に、交易センターとしては海沿いの砂丘地に新たな大集落が出現する。博多遺跡群や堅粕遺跡群がそれであり、博多には弥生時代から集落は存在するが、弥生終末から古墳前期にかけてこれらは非常に濃密な大集落に成長する。方形周溝墓群の造営も行われる。特筆すべきは、東海西部系（S字彫など）、播磨型庄内壺、楽浪系漢式土器、韓半島南～西部系土器、山陰系土器といった列島内外各地の多系統の搬入土器が出土していることである。港町的な、交易のセンター性を有した集落群なのである。博多遺跡群では、当時としては進んだ技術である鍛冶関連遺構・遺物の検出がある。博多、堅粕、比恵・那珂、あるいは雀居の各遺跡群は、古墳時代初頭前後の北部九州の土器様式の変容の過程で、畿内系土器群受容の先駆け的な遺跡群である。筑前型庄内壺、北部九州型布留壺、小型精製土器群などの、より洗練された畿内系土器群を九州の他地域よりも一足早く受容、在地生産したとみられ、一部は九州各地にも搬出している。北部九州における畿内系土器の製作技法は、まずこれらの遺跡群を経由してから各地に伝播した可能性が高い（久住猛雄 1999 「北部九州における庄内式併行期の土器様

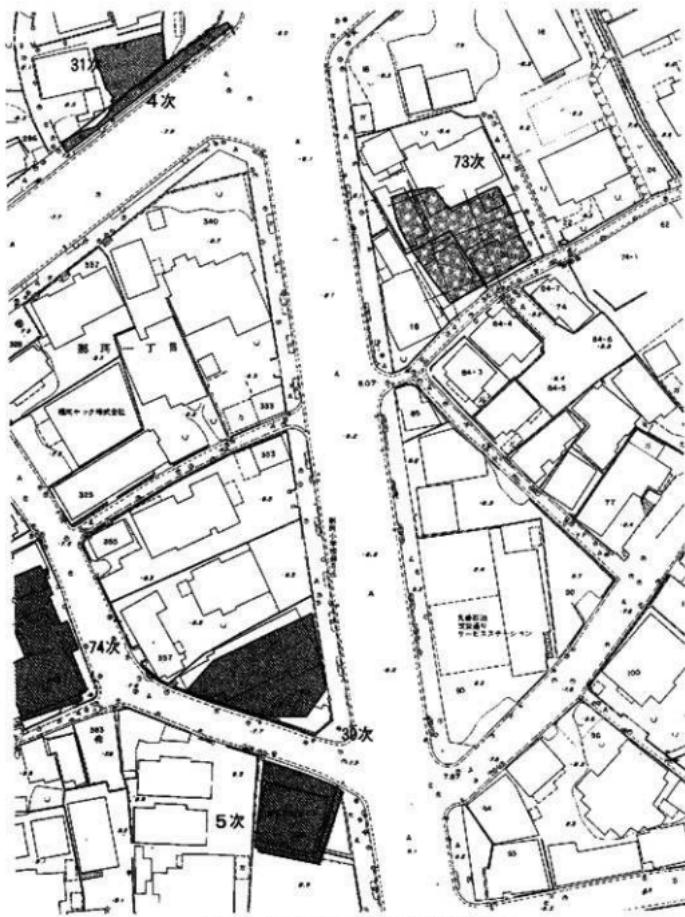


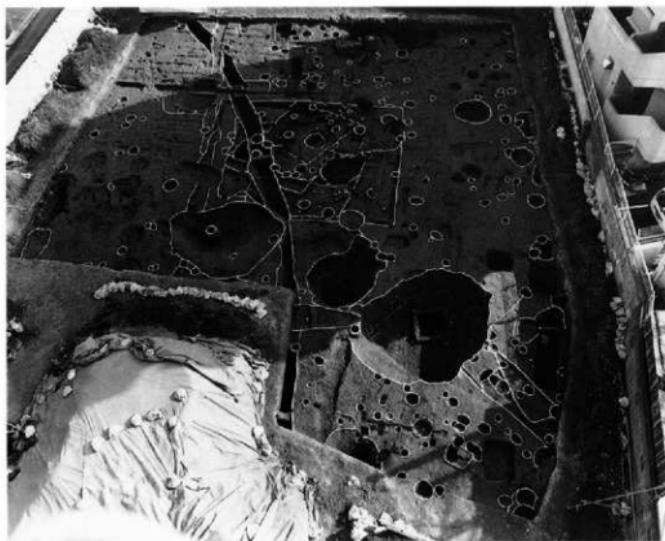
Fig. 2 那珂73次調査の位置 (S=1/1,000)

相」『庄内式土器研究』XIX 庄内式土器研究会)。弥生終末から古墳前期中頃までの「奴国」の中核は比恵・那珂遺跡群である。ところが、その隆盛は古墳前期中頃を以て終了し、以後の遺構数は激減し、福岡平野の中核的な集落は何処に移ったか今のところ不明な状況である。前期中頃以降の首長墓である卯内尺古墳・老司古墳(南区)、安徳大塚古墳(那珂川町)が那珂川流域中～上流にあることから、中心的な集落も内陸部へ移動した可能性があるが定かではない。古墳前期中頃には、福岡平野の有力な集落が一齊に衰退しており、なんらかの社会的・政治的変動があった可能性がある。韓式系土器の出土から対外交易港と目される西新町遺跡(早良区)もまたほぼ同じ時期に集落が消滅する。

その後の比恵那珂遺跡群では、無人に近い状況がしばらく続いたようであるが、5世紀末前後の劍塚北古墳の築造頃から集落が再開する。6世紀中頃の東光寺劍塚古墳は三重の周溝を巡らす全長75mの前方後円墳であり、この築造頃から那珂台地で有力な集落が形成されるようである。6世紀後半に



Fig. 3 調査区概要図 (S=1/400)



Ph. 1  
調査区全景  
(北から)

なると、比恵・那珂遺跡群全体に堅穴住居、掘立柱建物、溝などの遺構が展開するようになる。6世紀末以降、「那津官家」の可能性が指摘される比恵8・72次の大型倉庫群と多重柵列をはじめとして、大型掘立柱建物や多重柵列が複数地点で検出されている。「日本書紀」の「筑紫大宰」の根据地とする説もある。那珂22次などでは、九州では最古の部類に属する瓦が出土しており、寺院や官衙が存在した可能性が高い。さらに7世紀中頃～末頃には正方位の溝が那珂台地を縦横に走行し、「日本書紀」の「長津宮(岩瀬宮)」になる可能性さえある。8世紀(奈良時代)の遺構も多く、那珂郡の郡衙が一時期は那珂遺跡群に存在した可能性もあり、今後の発見がまたれる。また以後、中世にも集落が継続、特に中世後期には那珂遺跡群の段丘において段丘を縦横に走る大溝がいくつも検出され、段丘上には城館のような有力者の屋敷がいくつも存在したようであり、また台地の造成が行われこれ以前の遺構の残存が悪い部分が少なくなっている。

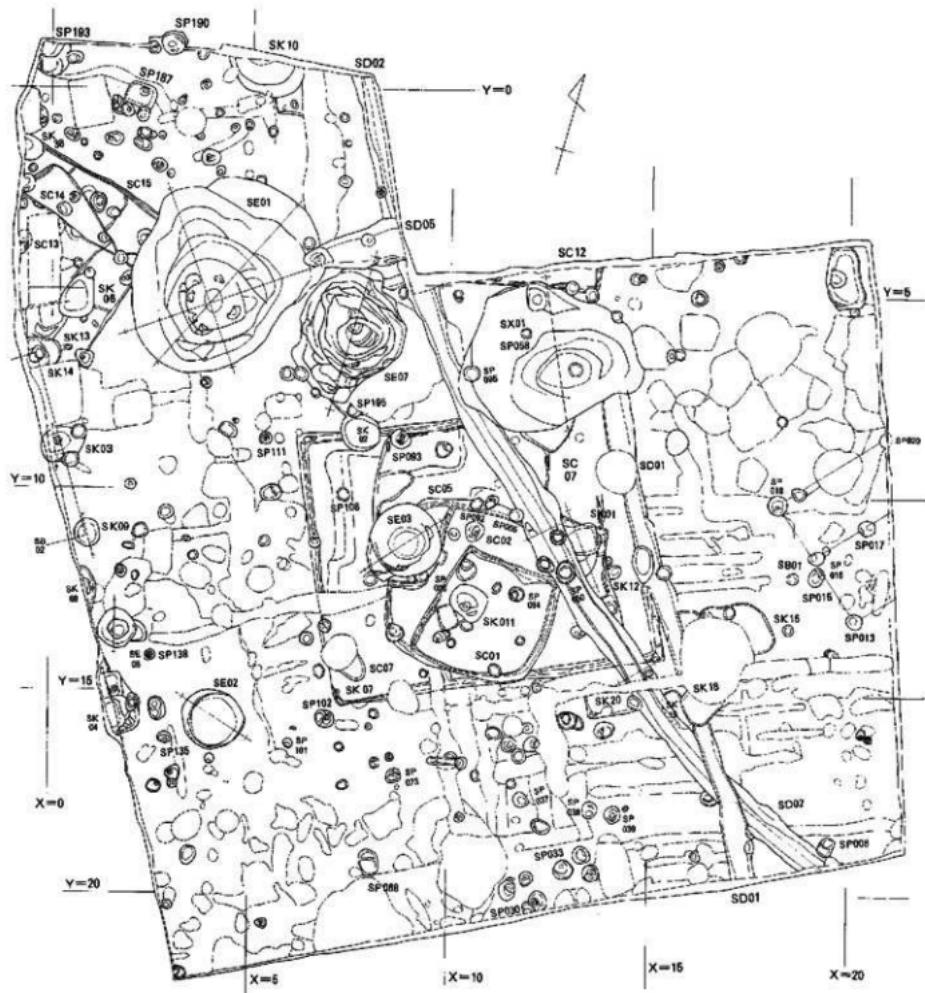


Fig. 4 那珂73次調査区全体図 (S=1/125)

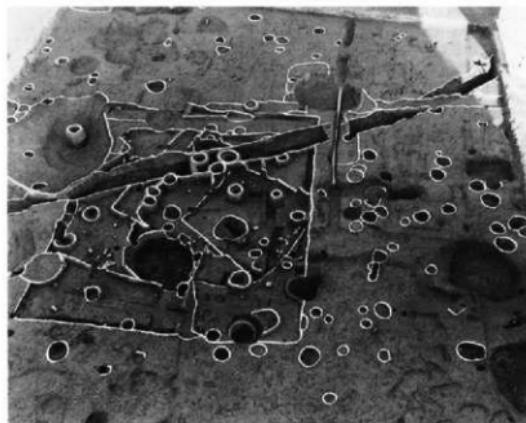
### III. 調査の記録

## 1. 調査の概要

調査地（Fig. 2・3）は筑紫通りに面し、調査以前は住宅敷地として利用されていた。それ以前は耕作地としても使われていたとみられ、若干の削平がみられる。調査前の標高は8.1~8.5m前後である。現地表下25~50cm前後の耕作土なしで搅乱土を除去したところで橙褐色の鳥栖ローム面となり、これを遺構検出面とした。遺構の残存状況は、堅穴住居が深いもので床面まで30cm前後があるので著しく悪いと言えないが、ベッド状遺構は数cmでその床面が検出されてしまう状況であった。検出



Ph. 2 調査区北西部 (SE01周囲) 写真 (南西から)



Ph. 3 中央住居群および調査区南部写真 (東から)

遺構は、井戸 5 基、竪穴住居 7 ないし 8 棟、溝状遺構 3 条、土壙墓 1 基、土坑 20 基前後（大型の柱穴も含む）、柱穴多数、掘立柱建物 2 棟以上である (Fig. 4, Ph. 1)。調査区北西部 (Ph. 2) から中央部 (Ph. 3) は特に遺構が多い。遺物は、パンケース 100 箱前後（他に井戸枠部材多数あり）の量が出土した。井戸枠部材を含めるパンケース 150 箱前後の換算となる。遺物の種類には、弥生土器、古式土師器、古墳時代後期～古代の土師器、須恵器、中世以降の土師器・輸入陶磁器・国産陶磁器、石器（旧石器・縄文・弥生時代剥片）、石製品、鉄製品（弥生、中世）、銅製品（中世）、井戸枠部材などがある。

## 2. 検出遺構

### 1) 井戸址 (SE)

- SE01 (Fig. 5~10, Ph. 4~18)

調査区北西部で検出した。上面径 4.6 × 5.2m の不整円形、検出面からの深さ 4.8m を測る非常に大きな井戸である。掘方底の標高は 3.13m。掘方の断面は、基本的に先ずは気味の円錐形だが、八女粘土の途中で段状になり狭まる部分がある (Fig. 7)。また最上層の北側は一段テラス状に広くなっている。最下層は青灰色の硬質シルト層および、湧水がかなりみられる。

調査中は、夕方までポンプで水抜きしていたが、翌朝には掘方の半分ぐらいまでは水が溜る状況であった。上面で遺構を検出して掘削を始めると、掘方中央に井戸側（枠）部分の上方の落ち込みと見られる部分が容易に観察されたが、この部分を振り出すと土師器の壊・皿の大量廃棄層があらわれた (Ph. 4, 5)。間に微妙な間層を挟む何回かの廃棄によるものようだが (Fig. 6)、出土した土師器の型式の時間差はなさそうである。また、完形品も含むが、廃棄単位ごとの中でどうしても完形にならないものが多く、井戸枠上部の落ち込みに廃棄する以前に、すでに一度破碎・廃棄されたものが投棄されたものと考える。掘削は、井戸側部分と掘方部分とを交互に掘削していくが（途中に土層確認の半蔵を含むが出土遺物は分離している）、検出面から 1.4 ~ 1.5m 掘ったところでそれ以下の井戸側（枠）部材が残っていることが判明した。以下は何十 cm ごとに、井戸枠内部と掘方を交互に掘削していくが、掘方の径などからも、どうもかなり深く井戸枠が存在することを予想して、一気に掘る

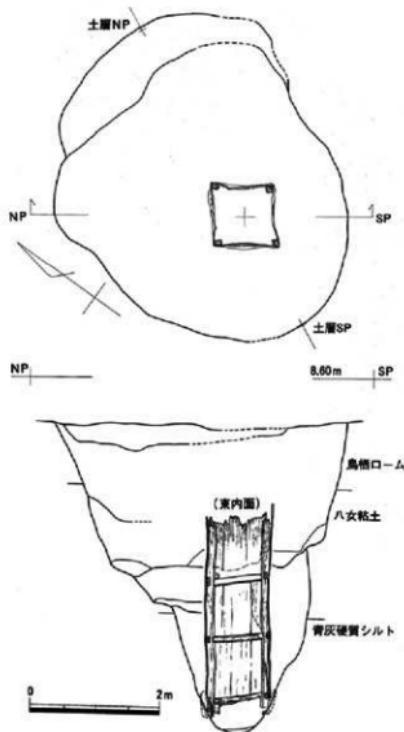
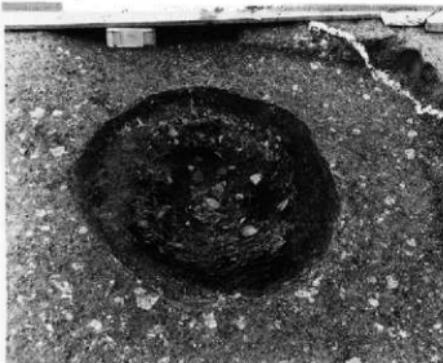


Fig. 5 SE01 概略図 (S=1/75)



Ph. 4 SE01 井戸側上部土器出土状況 (西から)



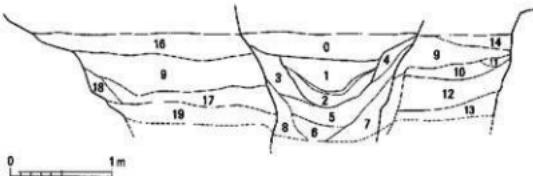
Ph. 5 SE01 上層土層状況 (北西から)



Ph. 6 SE01 下層掘り方土層・井戸枠北面 (北から)

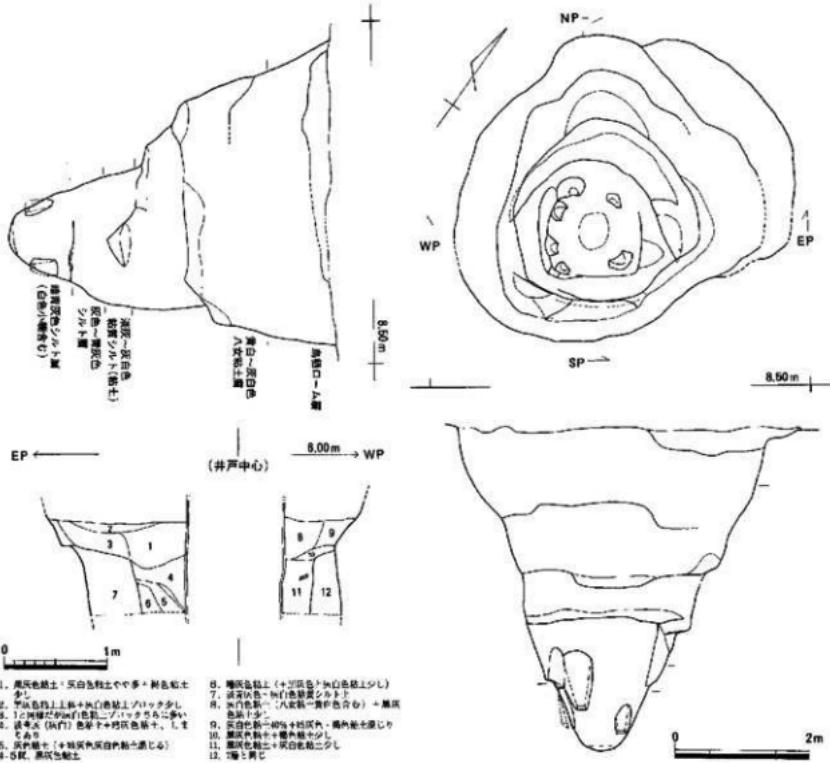
と井戸枠が崩れる恐れがあったため、井戸枠内側に最上段の横棟が現れたレベルのやや下で一度掘削をやめ、図面や写真を記録し、井戸枠上段の枠板を取り外してから下部を掘ることにした。井戸枠外側（掘方）はまず北側を半截して北面の図面と写真を記録するとともに、掘方土層を検討した（Fig.8、Ph.6）。この土層の検討では、一度埋めた掘方の埋土（灰白色土）をやや狭い新しい掘方の土層（黒色土）が切るように観察できた。この観察が正しければ、井戸枠は一度は作り直しされたことになる。次に、残りの南側の掘方土を掘削除去し、南・東・西の井戸枠外面の状況を記録し（Ph.8,9）、平行して井戸枠内面も記録し、最上段の井戸枠縦板部材を取り上げた。なお、井戸枠内面を精査すると、横棟前後は黒色のきめの細かい粘土で目貼りが施されていることが分かった（Fig.10のアミ部、Ph.7）。以下、井戸枠内部と外側掘方を平行して掘削し、部材の下部をほぼ確認したところで図面と写真を記録した（Ph.11～

17、Fig.9,10)。図面は上段のところを書いてあったものに付け足しを加えながら作成している。この際の作業は、激しくはないが確実に水位が上がってくる湧水をポンプで除去しながらの作業であり、また折しも冬場の作業であって、寒さあるいは水の冷たさとの戦いともなった。図面をほぼ作成したところで、部材を一つ一つ取り上げながら、図面に細部を書き加えていったが、部材の残りがきわめて良好で、横棟がしっかりと隅柱にはまっていたので(裏表紙写真)、また隅柱は長さ約3mも



0. 土性の方が土より多い層
1. 大人地 (0.2m) 塗覆色土、含泥も多
2. 厚層 塗地色土 (土器少)
3. 18cm (灰褐色)
4. 細粒灰色骨質土、土器少し
5. 細粒灰褐色灰質土 (灰) - 植質 (灰) 土、ローム・八女粘土ブロック少し
6. 灰褐色粘質土、土器細片若干、ローム粘土ブロック少
7. 石塊・暗褐色粘質土、土器細片・灰れ少し、ローム・八女粘土ブロック少
8. (井) 湧出灰・精選色灰質土、ローム・八女粘土ブロック若干
9. (井) 黄色土・八女粘土ブロック多、ロームブロックや少
10. 深色・暗褐色土
11. 黒褐色土+褐色土、火粒をや多く含む
12. 前場地・褐色土+ローム・八女粘土ブロックや少
13. 前場地+場地土・ロームブロック (大) 多量
14. 16番 (灰) 土
15. 細粒土+ロームブロック・八女粘土ブロック若干、やや多
16. (井) 褐色土・ローム・八女粘土ブロック (大) やや多・多量
17. 細粒土 (少) +褐色土+ローム・八女粘土ブロックや少 (3cmより細い)
18. 細粒土+明褐土+ローム・八女粘土ブロックや少・若干
19. 黑褐色土 (少) +褐色土・八女粘土ブロック (大) 多量

Fig. 6 SE01 上層土層図 (S=1/50)



1. 黄褐色土・灰褐色土やや多・褐色土少
2. 黄褐色土・上段・外白粘土・ハリタ少
3. 黄褐色土・上段・外白粘土・ハリタ少
4. 黄褐色土 (灰白) 黄色土+褐色土少
5. 沈れ部 (土器・土器・土器・土器・土器)
6. 黄褐色土・土器・土器・土器・土器
7. 塗覆色土・褐色土・土器・土器
8. 灰褐色土 (八女粘土・褐色土・土器)
9. 黄褐色土 (八女粘土・褐色土・土器)
10. 黄褐色土 (八女粘土・褐色土・土器)
11. 黄褐色土 (八女粘土・褐色土・土器)
12. 黄褐色土

Fig. 8 SE01 下層掘り方土層図 (S=1/50)

Fig. 7 SE01 掘り方図 (S=1/75)



Ph. 7 井戸側北面内面上部粘土目張り状況（南から）



Ph. 8 SE01 井戸枠上半西面（西から）



Ph. 10 SE01 挖り方完掘状況（東から）



Ph. 9 SE01 井戸枠上半東面（東から）



Ph. 12 SE01 井戸枠内面（北側上から）



Ph. 11 SE01 井戸枠（北側上から）



Ph. 13 SE01 井戸枠下半西面



Ph. 14 SE01 井戸枠下半南面

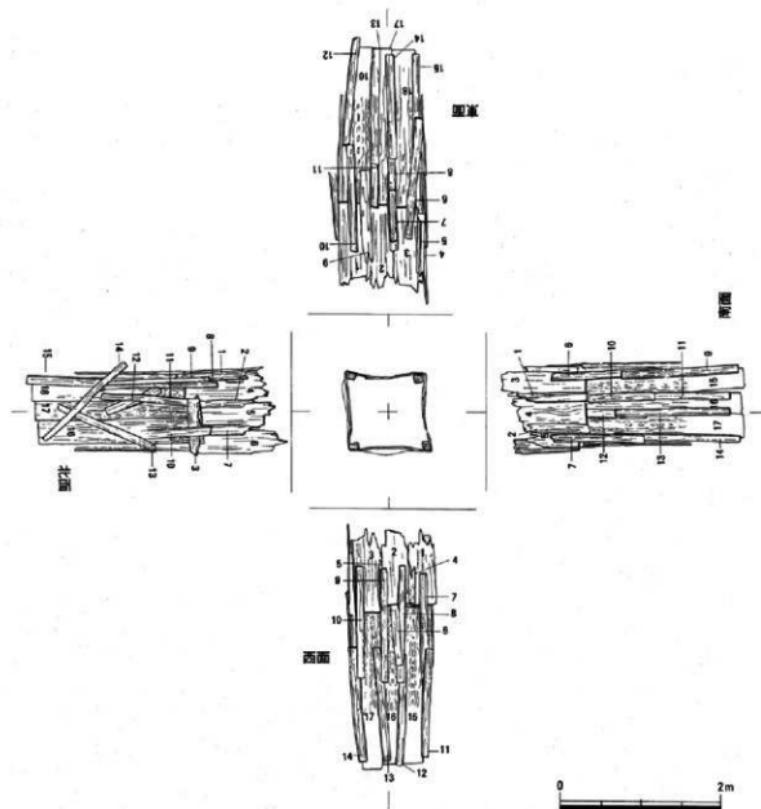


Fig.9 SE01 井戸側外表面実測図 (S=1/60)



Ph.15 SE01 井戸枠下半東面

あり重く、下部は地山に一部打ち込まれたような状況であったので、その取り上げはかなり苦労した。なお部材の取り上げは、図面に東西南北面ごとに各部材の番号を付し、かつどちらが上で、どちらが内面（外面）か分かるように取り上げている。これは、残りが良好であったために、将来的に再び組み上げることも可能なように考慮したためである。井戸枠を取り上げ後は、掘方を精査し、その写真と図面を記録した（Ph.10、Fig. 7）。なお、方形の井戸枠の下部には曲物などの施設は無く、最下部の横樋より下は約90cm程度ただ掘りくぼめられているだけであった。またこの部分（最下層）は、10～60cm前後の大小の礫（パンケース4箱分）が投げ込まれていた状況であった（Ph. 18）。井戸の廃棄に伴う祭祀であろうか。井戸枠は、平面方形で隅柱と横樋を用い、また縦板の側板を用いるタイプである。各部材についてはTab. 1を参照されたい。

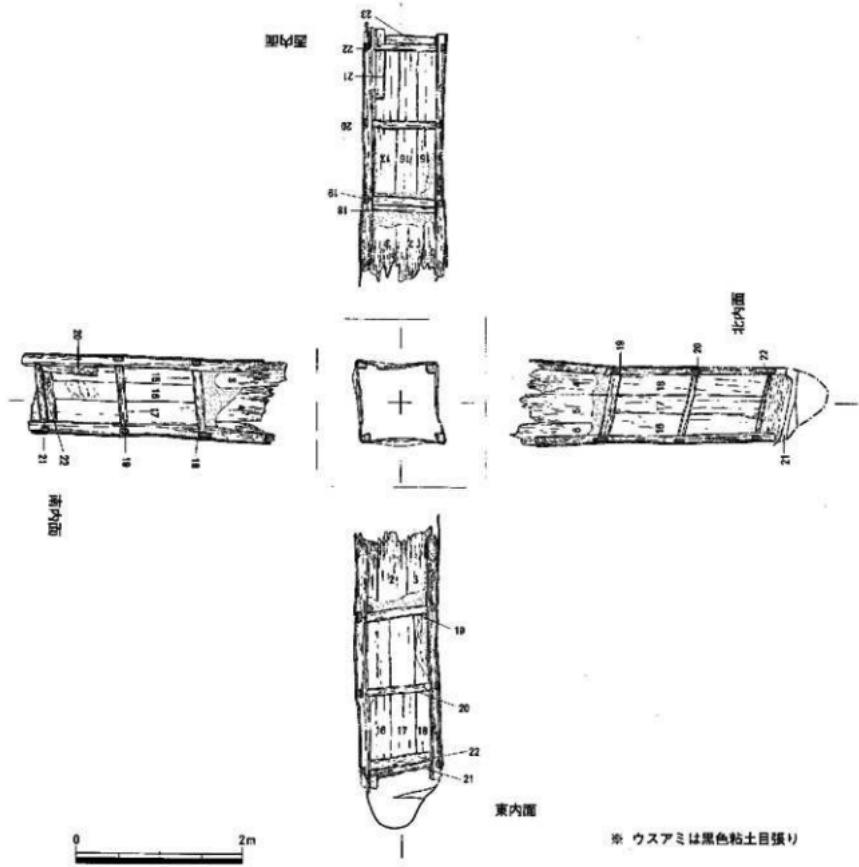


Fig. 10 SE01 井戸側内面実測図 (S=1/60)

隅柱と横棟はホゾ穴で差し込まれ固定されている。横棟は3段認められたが、本来的には井戸枠を検出したレベル前後でもう一段あったことが隅柱のホゾ穴の存在から分かる。縦側板は幅30cm前後のやや厚いものを、横棟の外側に2段、各面3枚並べている。上段の縦側板の下部は、下段の縦側板の内側に入り込んで組まれる。縦側板の外側は、さらに薄く10cm内外幅の細継板を縦側板の合わせ目の外を埋めるように組まれるのが基本だが、これは掘方を土で埋めながら固定されたものだろう。一部斜めの細継板があるが、これは初めから斜めなのかどうかは不明である。また北面の上段横棟の外側では、縦側板の上下の合わせ目の外をさらに横板で覆う。また井戸枠外の掘方下層黒色土中に、余分な細継板が何本か検出されているが、これは作り直し前の部材の廃棄であろうか。井戸枠最下部の内面は、横棟が各面2枚認められるが、いずれの面も一枚(本)が隅柱のホゾ穴に組み合わされるものであるが、残りの1枚の特徴は各面ごとに異なり、本来は井戸枠部材ではないものの転用と推察されるものもある。また最下部内面の西面右と南面左は、細継板が矢板状に下部に打ち込まれている。これらの最下部の状況は、井戸枠の崩壊を防ぐ工夫であろうが、ややその場しのぎ的な感がある。

| 番号  | 種類           | 出土量 (cm) |        | 形状   | 写真               | 実測     |
|-----|--------------|----------|--------|------|------------------|--------|
|     |              | 高 (残高)   | 幅 (残幅) |      |                  |        |
| 南1  | 鉢外板板 (一段目東)  | (74.6)   | 11.1   | 直板   | ○                |        |
| 南2  | 鉢外板板 (一段目西)  | (77.1)   | 11     | 直板   | ○                |        |
| 南3  | 鉢外板板 (二段目東)  | (105)    | 26     | 4    |                  |        |
| 南4  | 鉢外板板 (二段目中央) | (70)     | 26     | 2    |                  |        |
| 南5  | 鉢外板板 (二段目西)  | (70)     | 26     | 2    |                  |        |
| 南6  | 鉢外板板 (二段目東)  | 139      | 8.6    | 7.3  |                  |        |
| 南7  | 鉢外板板 (二段目西)  | (108.5)  | 19.5   | 1.3  |                  |        |
| 南8  | 欠番           |          |        |      |                  |        |
| 南9  | 鉢外板板 (三段目東)  | 142.5    | 10     | 1.1  | 直板               | ○      |
| 南10 | 鉢外板板 (三段目中央) | 98.3     | 9      | 1    | 直板               | ○      |
| 南11 | 鉢外板板 (二段目中央) | 141      | 8.2    | 1.0  | 直板               | ○      |
| 南12 | 鉢外板板 (二段目中央) | (78.2)   | 16     | 0.7  | 直板               | ○      |
| 南13 | 鉢外板板 (三段目中央) | 141      | 8.5    | 1.4  | 直板               | ○      |
| 南14 | 鉢外板板 (二段目西)  | (160)    | 10.5   |      |                  |        |
| 南15 | 鉢外板板 (一段目東)  | 159      | 2.2    | 2.5  | 斜板・手斧削り          | ○      |
| 南16 | 鉢外板板 (一段目中央) | 183      | 21.7   | 2    | 斜板・手斧削り          | ○      |
| 南17 | 鉢外板板 (二段目東)  | 198      | 28.8   | 2.4  | 斜板・手斧削り          | ○      |
| 南18 | 井戸内板板 (一段目)  | 85.2     | 10.8   | 4.4  | 斜板・手斧削り          | Pn. 58 |
| 南19 | 井戸内板板 (二段目)  | 86       | 7      | 3.3  | 斜板・手斧削り          | Pn. 58 |
| 南20 | 井戸内板板 (二段目)  | (89.5)   | 9.6    | 1.4  | 斜板・手斧削り          | Pn. 58 |
| 南21 | 井戸内板板 (三段目)  | 74.3     | 7.8    | 3.7  | 斜板・手斧削り          | Pn. 58 |
| 南22 | 井戸内板板 (二段目)  | 86.3     | 13.6   | 3.2  | 斜板・手斧削り          | Pn. 58 |
| 北1  | 鉢外板板 (一段目東)  | (87)     | 5.5    |      |                  |        |
| 北2  | 鉢外板板 (一段目中央) | (81)     | (8.2)  | 0.3  |                  |        |
| 北3  | 鉢外板板 (一段目西)  | (81)     | 5      | 1.9  |                  |        |
| 北4  | 鉢外板板 (一段目東)  | (101.5)  | 34.5   | 1.8  |                  |        |
| 北5  | 鉢外板板 (一段目中央) | (102)    | 32     | 1.8  |                  |        |
| 北6  | 鉢外板板 (一段目西)  | (102)    | 32     | 2.3  |                  |        |
| 北7  | 鉢外板板 (二段目東)  | (94.5)   | 12     | 0.3  |                  |        |
| 北8  | 鉢外板板 (二段目東)  | 146.7    | 10.3   | 1.1  |                  |        |
| 北9  | 鉢外板板 (二段目西)  | 136.5    | 9.8    | 1.0  |                  |        |
| 北10 | 鉢外板板 (二段目西)  | 88       | 11     | 1.2  |                  |        |
| 北11 | 鉢外板板 (二段目東)  | 150      | 8      | 0.9  |                  |        |
| 北12 | 鉢外板板 (三段目東)  | 71       | 8.6    | 1.8  |                  |        |
| 北13 | 鉢外板板 (三段目中央) | 131      | 8.7    | 1.9  |                  |        |
| 北14 | 鉢外板板 (三段目西)  | 143.2    | 8.0    | 1.4  |                  |        |
| 北15 | 鉢外板板 (三段目東)  | 147.6    | 8.6    | 1.0  |                  |        |
| 北16 | 鉢外板板 (三段目西)  | 153.6    | 38.4   | 3.0  |                  |        |
| 北17 | 鉢外板板 (二段目東)  | 194.7    | 22     | 3.4  |                  |        |
| 北18 | 鉢外板板 (二段目西)  | 196      | 26     | 1.8  |                  |        |
| 北19 | 井戸内板板 (二段目)  | 85.5     | 11     | 4.2  | 斜板・手斧削り          | ○      |
| 北20 | 井戸内板板 (二段目)  | 85.5     | 6.4    | 3    | 斜板・手斧削り          | Pn. 58 |
| 北21 | 井戸内板板 (三段目)  | 71.2     | 28     | 2.8  | 斜板・内面及び斜面の一部手斧削り | Pn. 58 |
| 北22 | 井戸内板板 (三段目)  | 86.3     | 7.7    | 3.7  | 斜板・手斧削り          | Pn. 58 |
| 東1  | 鉢外板板 (一段目北)  | (69.7)   | 22     | 1.7  |                  |        |
| 東2  | 鉢外板板 (一段目中央) | (1)      | 2      | 2    |                  |        |
| 東3  | 鉢外板板 (一段目西)  | (95.6)   | 31.4   | 2.0  | 斜板・手斧削り          | ○      |
| 東4  | 鉢外板板 (一段目西)  | (63.8)   | 6      | 5    | 斜板               | ○      |
| 東5  | 鉢外板板 (40cm西) | (48.6)   | 8.1    | 6.7  | 斜板               | ○      |
| 東6  | 鉢外板板 (二段目東)  | 150.5    | 9.5    | 1.9  | 斜板               | ○      |
| 東7  | 鉢外板板 (二段目中央) | (102.2)  | 8      | 1.7  | 斜板               | ○      |
| 東8  | 鉢外板板 (二段目西)  | (76)     | 9.5    | 0.4  | 斜板               | ○      |
| 東9  | 鉢外板板 (二段目中央) | (111.8)  | 12.2   | 0.2  | 斜板・審査にうすい        | ○      |
| 東10 | 鉢外板板 (二段目西)  | (104)    | 10     | 1.4  | 斜板               | ○      |
| 東11 | 鉢外板板 (三段目)   | 164.8    | 8.5    | 1.1  | 斜板               | ○      |
| 東12 | 鉢外板板 (三段目)   | 154      | 8.5    | 1.0  | 斜板               | ○      |
| 東13 | 鉢外板板 (4段目東)  | 150.2    | 11.2   | 1.0  | 斜板               | ○      |
| 東14 | 鉢外板板 (4段目西)  | 159.7    | 18.8   | 1.8  | 斜板               | ○      |
| 東15 | 鉢外板板 (4段目西)  | 131      | 6      | 1.0  | 斜板               | ○      |
| 東16 | 鉢外板板 (一段目北)  | 193.5    | 26.7   | 2.2  | 斜板・手斧削り          | ○      |
| 東17 | 鉢外板板 (一段目中央) | 194.5    | 22     | 2    | 斜板・手斧削り          | ○      |
| 東18 | 鉢外板板 (一段目西)  | 191      | 18.2   | 2.5  | 斜板・手斧削り          | ○      |
| 東19 | 井戸内板板 (一段目)  | 67       | 9.5    | 5    | 斜板・手斧削り          | ○      |
| 東20 | 井戸内板板 (二段目)  | 86       | 8.5    | 3.8  | 斜板・手斧削り          | ○      |
| 東21 | 井戸内板板 (三段目)  | 85.3     | 8      | 4    | 斜板・手斧削り          | ○      |
| 東22 | 井戸内板板 (三段目)  | 85.      | 13.8   | 2.0  | 斜板・手斧削り          | ○      |
| 東23 | 井戸内板板 (三段目)  | (76.5)   | 31     | 2.5  | 斜板・手斧削り          | ○      |
| 東24 | 鉢外板板 (一段目北)  | (50)     | 20.5   | 2    | 斜板・手斧削り          | ○      |
| 東25 | 鉢外板板 (一段目西)  | (57)     | 26.5   | 1.5  | 斜板・手斧削り          | ○      |
| 東26 | 鉢外板板 (一段目西)  | (51.5)   | 8.2    | 6.7  | 斜板               | ○      |
| 東27 | 鉢外板板 (一段目東)  | (57.2)   | 5.5    | 2.3  | 斜板               | ○      |
| 東28 | 鉢外板板 (三段目中央) | 78.4     | 10.3   | 3.0  | 斜板・下部内面削り        | Pn. 58 |
| 東29 | 鉢外板板 (二段目東)  | 134.5    | 9      | 1.3  | 斜板               | ○      |
| 東30 | 鉢外板板 (二段目中央) | 143.2    | 7.5    | 1.2  | 斜板               | ○      |
| 東31 | 鉢外板板 (三段目中央) | 136.8    | 8      | 1.2  | 斜板               | ○      |
| 東32 | 鉢外板板 (三段目東)  | 136.2    | 8.5    | 2    | 斜板               | ○      |
| 東33 | 鉢外板板 (4段目東)  | 134      | 8.5    | 1    | 斜板               | ○      |
| 東34 | 鉢外板板 (4段目中央) | 141.2    | 8.5    | 1.3  | 斜板               | ○      |
| 東35 | 鉢外板板 (4段目中央) | 139      | 8.9    | 1.3  | 斜板               | ○      |
| 東36 | 鉢外板板 (4段目西)  | 141      | 8.3    | 1.3  | 斜板               | ○      |
| 東37 | 鉢外板板 (一段目北)  | 194.5    | 24.5   | 2    | 斜板・手斧削り          | Pn. 58 |
| 東38 | 鉢外板板 (一段目中央) | 198      | 24     | 2.8  | 斜板・手斧削り          | Pn. 58 |
| 東39 | 鉢外板板 (一段目北)  | 191      | 27.8   | 2.3  | 斜板・手斧削り          | Pn. 58 |
| 東40 | 井戸内板板 (一段目北) | 79.5     | 8.4    | 4.8  | 斜板・手斧削り          | Pn. 58 |
| 東41 | 井戸内板板 (一段目下) | 85.5     | 10     | 4    | 斜板・手斧削り          | Pn. 58 |
| 東42 | 井戸内板板 (二段目西) | 65       | 8      | 4.3  | 斜板・手斧削り          | Pn. 58 |
| 東43 | 鉢外板板 (一段目)   | (58)     | 10.5   | 1.6  | 内面及底削り           | Pn. 58 |
| 東44 | 井戸内板板 (二段目)  | 71.8     | 8.3    | 2.6  | 斜板・手斧削り          | Pn. 58 |
| 東45 | 井戸内板板 (三段目)  | (298)    | 11.6   | 2.6  | 斜板・石斧削り          | Pn. 58 |
| 東46 | 井戸内板板 (二段目)  | (288.6)  | 12.0   | 10.2 | 斜板を手斧削り          | Pn. 58 |
| 東47 | 井戸内板板 (三段目)  | (294.4)  | 14.4   | 11.4 | 各面を手斧削り          | Pn. 58 |
| 東48 | 井戸内板板 (三段目)  | (289)    | 14     | 12   | 各面を手斧削り          | Pn. 58 |

Tab. 1 SE01 出土部材一覧表



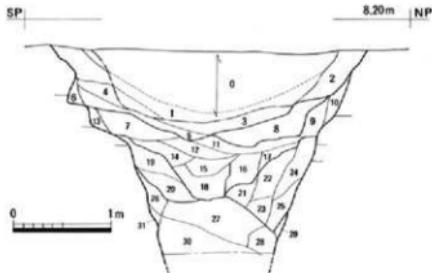
Ph.16 SE01 井戸枠下半北面



Ph.17 SE01 井戸枠下半（北東から）



Ph.18 SE01 最下層出土投げ込み跡



- O. 道路が当り、表面粗面土。しまりあり
1. 岩盤の上に小量の土をこびり付く
2. 砂質粘土。植物あまりなし
3. 砂質粘土。しまりやや多い。植物を少し含む
4. 2層のロームブロック土。植物あまりない
5. 2層のロームブロック土。植物あまりない
6. 2層のロームブロック土。植物あまりない
7. 2層のロームブロック土。植物あまりない
8. 黄褐色土。疊たる性あり。植物少しあし。塊状にローム土少し。
9. 黄褐色土。ロームブロックや多い。植物は
10. 黄褐色土。
11. 2層の土。
12. 黄褐色土。ロームブロック層状に若干（少し）なりる。含む
13. 黄褐色土。ローム土少し。
14. 黄褐色土。しまりやや多い。褐色土少し。人糞。
15. 黄褐色土。土と茶褐色土ロームブロック層
16. 少し含む。
17. 黄褐色土。植物含む。
18. 黄褐色土。ローム土少し。
19. 黄褐色土。表面粗面土。植物含む。
20. 黄褐色土。表面粗面土。植物含む。
21. 黄褐色土。表面粗面土。植物含む。
22. 黄褐色土。表面粗面土。植物含む。
23. 黄褐色土。表面粗面土。植物含む。
24. 黄褐色土。表面粗面土。植物含む。
25. 黄褐色土。表面粗面土。植物含む。
26. 黄褐色土。表面粗面土。植物含む。
27. 黄褐色土。表面粗面土。植物含む。
28. 黄褐色土。表面粗面土。植物含む。
29. 黄褐色土。表面粗面土。植物含む。
30. 黄褐色土。表面粗面土。植物含む。
31. 黄褐色土。表面粗面土。植物含む。
32. 黄褐色土。表面粗面土。植物含む。
33. 黄褐色土。表面粗面土。植物含む。
34. 黄褐色土。表面粗面土。植物含む。

Fig. 12 SE07 土層図 (S=1/50)

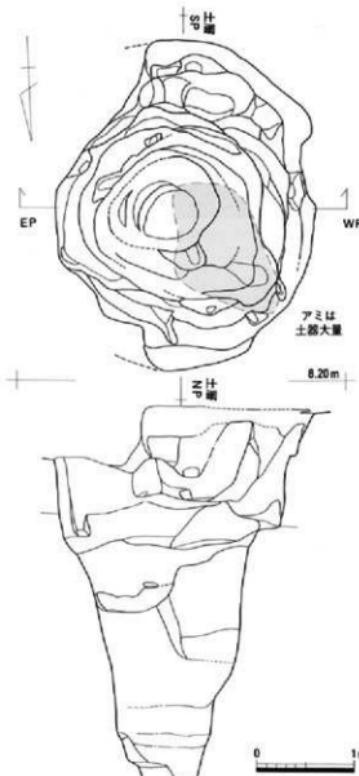


Fig. 11 SE07 実測図 (S=1/50)



Ph. 19 SE07 土器大量廃棄状況第1面（南から）



Ph. 20 SE07 土器大量廃棄状況第2面（南東から）



Ph. 21 SE07 土器廃棄状況第3面（東から）



Ph. 22 SE07 上半土層状況（南東から）

SE01の時期は、井戸枠落ち込み最上層の土師器一括（Fig.35）や同じ層位の瓦質土器の年代観から、その廃棄は14世紀前半～中頃になろう。井戸の構築時期は、掘方から口禿げの白磁碗を主体とする陶磁器があり（Fig.32）、龍泉窯系青磁の型式との組み合わせから13世紀後半頃に上限が置かれる。14世紀以降とみられる瓦質土器は掘方から出土しない。また確証はないが、掘方出土のFig.32-1の瀬戸焼鳥形水滴は13～14世紀頃とみられ、井戸の推定年代と矛盾しない。以上から、土器・陶磁器の層年代観は上下に動く可能性はあるが、13世紀後半～末頃にSE01は構築され、掘方土層の観察から一度の井戸枠の作り直しがあり、最終的に14世紀前半ないし中頃（第2四半期か）に廃棄されたと見ておく。なお、SE01は大宰府の井戸分類（横田賢次郎1977「大宰府検出の井戸」『九州歴史資料館論集』3）では（Ⅱ）-A類であるが、13世紀以降はないとされてきたものであり、検討をする。あるいは、これは那珂遺跡が大宰府のような中心的な地域ではないために周縁部に古い井戸型式が残ったと解釈してよいものか、ここでは判断は保留しておく。ただ、いずれにしても井戸の規模からみれば周辺では有数のものであり在地の有力者に関わるものとすることができよう。

• SE07 (Fig.11, Ph.19~23)

調査区中央北側で検出。上部に擾乱があり、当初プランも不明確で井戸かどうか確認がなかったのでSX03としていた。上面東西3.0m（復元）×南北3.4mの楕円形。深さは検出面より約4.0mを測る。掘方は先ずは丸い気味の円筒円錐状の断面だが、掘方斜面はなだらかではなく段状になる部分が多くでこぼこしている。上面より1.2m前後のところにテラスが廻り、以下やや径が小さくなる。土層の

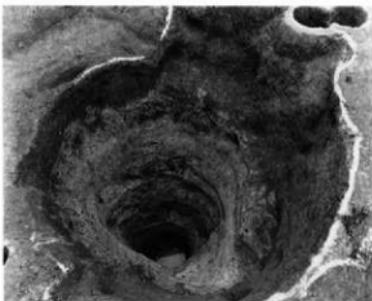
観察から、井戸枠は本来も存在せず、素掘りの井戸と考えられる (Fig.12, Ph.22)。最下部は八女粘土の下の青灰色シルト層を若干掘り込む。遺物は上層に破片を中心としてやや多くの土器片が出土したが、良好な完形を含む一括資料は中層以下にある。中層から下層には井戸の北西から投げ込まれた状況で、完形品を多く含む大量の遺物が折り重なるように出土した (Ph.19~21)。復元完形になるものを多く含み、遺存率が高い遺物が多い。この大量一括廃棄は大別3層に分けて取り上げたが、上下で接合するものがあり、また間層を挟むわけではなく（重なっている）、一連の廃棄である。この部分以外での中層以下の遺物の出土はそれほど多くない。SE07の時期は、出土遺物から (Fig.34, 42, Ph.70, 88)、8世紀前半の範疇と思われる。一部、7世紀後半～末（須恵器VI期）の遺物を含むが、これについては伴う可能性も排除しないが（VI～VII期の過渡期か）、重複関係にあるSD02上層に本来帰属する遺物が一部混入している可能性もある。このように一部問題があるが、北西側中～下層資料は8世紀前半のある段階を示す指標資料になりえよう。

・ SE03 (Fig.13, Ph.24)

調査区中央住居群を上部掘削中に検出。1.7×1.8mの円形、検出面からの深さ2.2mを測る。断面はやや先が狭い円筒形で、底面は平坦である。八女粘土の途中までの掘り込みで、他の井戸より浅いが、若干の湧水が認められ井戸でよかろう。南西側に突出部があるように見えるが、掘削後の検討からこれはSE03の一部ではなく、SC07の主柱穴を誤って一緒に掘削したものと判断した。これとは別に掘方斜面の南側と北東側に足場のような凹みがある。井戸側（枠）は特に施設は認められず、土層も一気に埋まつたものと観察したので素掘りの井戸であろう。井戸の時期は、出土遺物を検討すると (Fig.35~37)、瓦器碗や土師器の杯・壺や白磁碗があり、これらの型式観から、12世紀前半頃と考えられる。

・ SE02 (Fig.14, Ph.25)

調査区西側中央南で検出。上面径1.5mで、深さ2.7m以上。検出面から深さ1.2m前後の、鳥栖ローム層と八女粘土層の境界付近が大きく抉れており、崩落していたのでそれ以上の掘削は危険と判断し、掘削をやめている。したがって井戸側の有無は不明だが、掘削した範囲内ではその痕跡や存在したことをうかがわせる土層は観察されず素掘りであったとみた。遺物の出土は少ない。時期は、出土遺物を検討すると (Fig.34)、明代の染付などがあり、16世紀後半～17世紀前半とみられる（肥前系白



Ph. 23 SE07 堀り方完掘状況 (北から)



Ph. 24 SE03 完掘状況 (北東から)

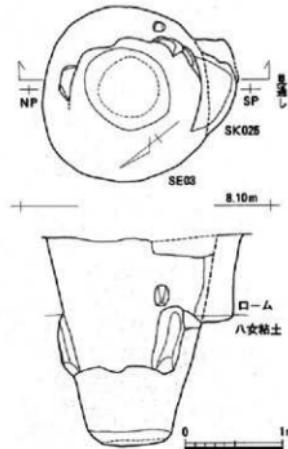
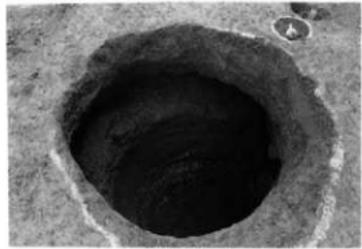


Fig. 13 SE03 実測図 (S=1/50)



Ph. 25 SE02 挖削状況 (北西から)

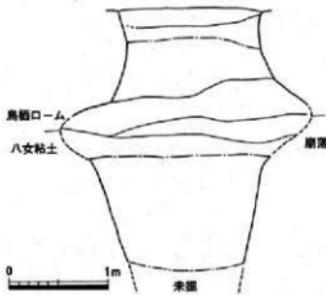
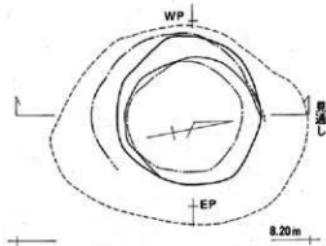
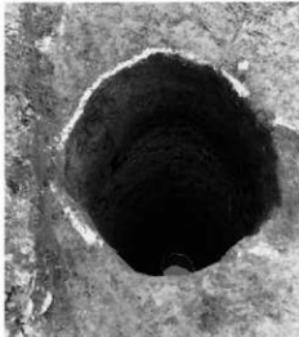


Fig. 14 SE02 実測図 ( $S=1/50$ )



Ph. 26 SE06 完掘状況 (南から)

磁紅皿があるが最上層の出土)。

• SE06 (Fig.15, Ph.26)

調査西端中央で検出。当初は径が小さいために土坑SK06としたが、みると深くなり井戸となった。最下部は八女粘土層を過ぎて青灰色シルト層まで掘り込んでいる。上面径 $0.9 \times 1.0$ m、検出面からの深さ4.25mを測る。鳥栖ロームと八女粘土の境界前後で若干の広がりがあるが、他はわずかに下にすばまる円筒状の断面である。出土遺物は少ない。時期は、出土遺物を検討すると (Fig.43)、新しいもので備前焼の片口瓶があり、14末~15世紀代と考えられる。未図化遺物で、やや外反する分厚い口縁で体部上位に沈圈線二条を有する龍泉窯系青磁碗V類 (博多分類) の破片もあり、15世紀であろう。SE01より後出か。

2) 穴住居址 (SC)

(1) 中央住居群 (Fig.16~20、Ph.3,27~42)

調査区中央で検出した、重複した住居群。最終的に古いものから、SC07→SC05→SC02→SC01の4棟の重複と判断したが (Fig.17)、このうちSC02とSC01は同一の住居のわずかに高いベッド部 (SC02) と土間部 (SC01) を分けてしまっている可能性が高い。その場合は3棟の重複である。さらに当初は、上面で複数回遺構検出をしたが、切り合が不明確なままやや強引に線引きをして掘削を開始してしまった。この時の当初の誤った認識のまま床面まで掘削してしまった部分がある (Fig.16)。途中で矛盾に気付き、その後の掘方の検討と、最終的には整理の過程で上記の認識となっている。当初の認識 (Fig.16) での「SC08」と「SC03」東半、「SC02」東半、「SC011」、「SC04」、「SC10」は結局SC07に、また「SC06」はSC02の一部になっている。またSE03と

Fig. 15 SE06 実測図 ( $S=1/50$ )

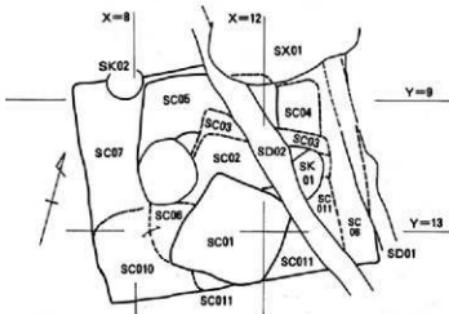


Fig. 16 中央住居群当初の認識 ( $S=1/150$ )

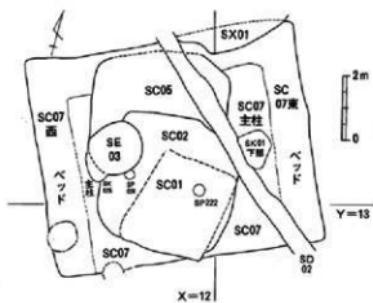


Fig. 17 中央住居群最終認識 ( $S=1/150$ )



Ph. 27 中央住居群掘り方掘削状況（北から）



Ph. 28 中央住居群掘り方掘削状況（西から）

Ph. 29 SC01-SC06 床面検出状況（南から）

一緒に掘ってしまった SK025 は SC07 の西側主柱穴、SK01 は上半は SC07 を切るが (SK01A)、下半は SC07 の東側主柱穴 (SK01B) と最終的に判断した。

- SC07 (Fig.18~20)

中央住居群でもっとも古い豎穴住居址。南北 6.8m × 東西 8.5m の大型の長方形住居。東西と北側に

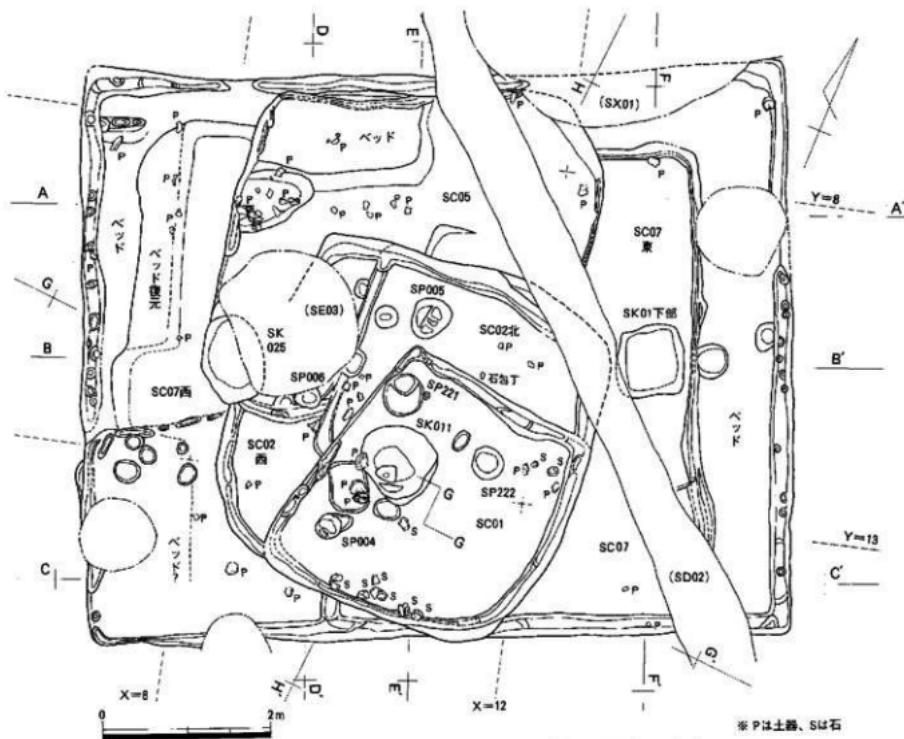


Fig. 18 中央住居群 (SC07・SC05・SC06・SC01) 平面図 (S=1/60)

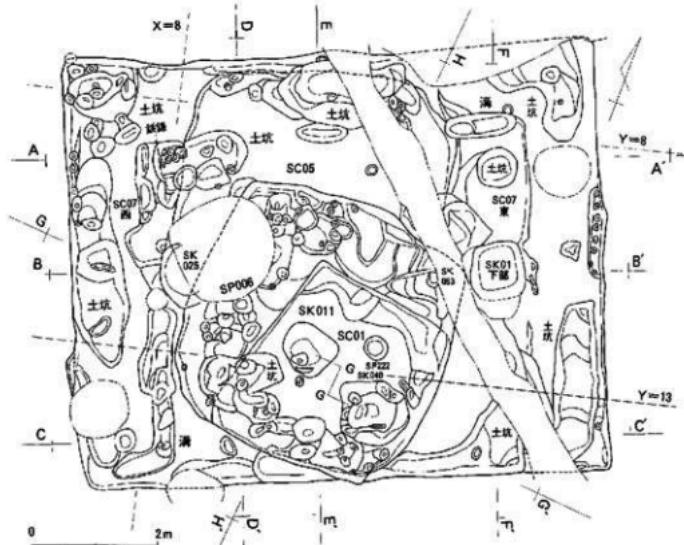


Fig. 19 中央住居群 (SC07・SC05・SC06・SC01) 掘り方平面図 (S=1/80)

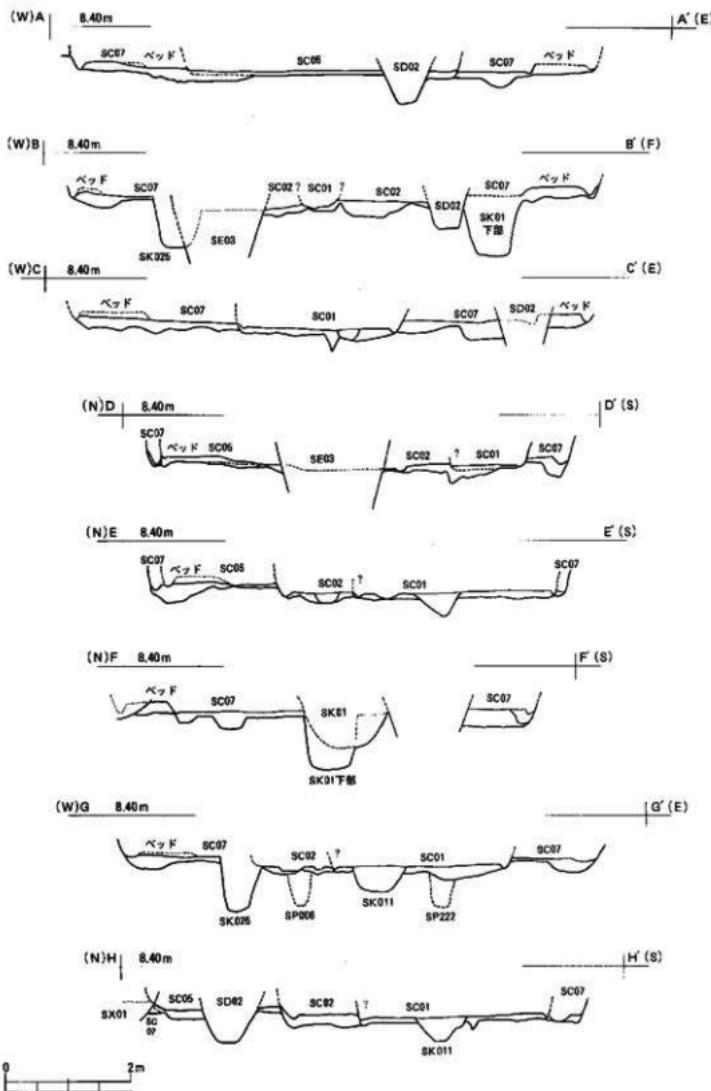


Fig. 20 中央住居群 A~H 断面図 (S=1/80)

「コ」字状にベッドを持つ。当初「SC08」としたのは住居址東側のベッド部、当初の「SC07」は同じく西側、「SC010」は南西側、「SC04」は北東側のベッドから下がった十間部である。中央の十間部の床面は検出面から25cm前後の深さで検出した。床は貼床で、数cmから10cm程度の厚さがあるローム土主体の固められた土である。ベッドは土間部より10~18cm前後高さ。東側のベッド状造構は残りが

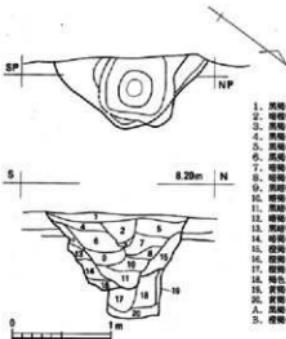


Fig. 21 SK01 平面図・土層図 (S=1/50)

良いが、検出面から数cm足らずでベッド床面が検出された。北側ベッドはSK01,SD02,SC05に切られ明確でなく、西側ベッドは掘り間違いなのか残りが悪いのか良好な状況で検出できなかった。南西側はベッドの有無が不明確だったが、掘方に北西側ベッドの東縁延長ラインに溝が認められたので、本来はあったものと考えられる。また西側中央はベッドが狭くなるようである。ベッド部は基本的に盛土（貼床の延長）である。ベッドの下部は断続的に土坑状に掘り凹められこれを埋めている（Fig.19）。北側ベッド中央にあたる下部にもこの埋められた土坑がある。北西側ベッドではこれを埋めベッドの盛土をする際に鉄錆を折った状態で埋め殺している（Ph.36）。何らかの祭祀行為か。またSC01掘方南東下部で検出したSK040は、本来はSC07に伴う「南面土坑」（入口関連施設）の可能性がある（Fig.20の断面図ではSC01の一部としている）。壁周溝はほぼ全周し、小杭状のものがあった痕跡がある。またベッドと土間部の間にも小溝があるが、これは東側では明瞭だが（Ph.31）、西側では掘方まで下げて一部検出した。主柱穴は2本あり、東側はSK01下部（Fig.21、Ph.30）、西側はSK025である。住居の平面形（長方形）、2本主柱、「コ」字状ベッドは北部九州の弥生時代終末期に典型的なものである。遺物は、覆土上層～下層にかけて散漫にかつやや多い量の土器片が出土した。また床面近くの下層および土間部床面（ないしベッド床面）直上でも若干の遺物が出土している（Ph.32,33ほか）。住居の時期は、出土土器（Fig.40）と住居型式から弥生時代終末、細かくいえば久住編年（久住猛雄 1999 「北部九州における庄内式併行期の土器様相」「庄内式土器研究」XIX）

1. 黒褐色土・解褐色土
2. 墓園地盤土・4種褐色土・黒褐色土
3. 黑褐色土・解褐色土・少し、硬膜少し
4. 黑褐色土・解褐色土・ヨーロップロックを若干
5. 黑褐色土・解褐色土・ヨーロップロックを若干
6. 黑褐色土・解褐色土・ロームアロカシ（4よりやや黒い）
7. 黑褐色土・解褐色土
8. 解褐色土・解褐色土・ヨーロップロック
9. 黑褐色色土・解褐色土・ローム土少し
10. 黑褐色土・ヨーロップロック
11. 黑褐色土・解褐色土・ヨーロップロック
12. 黑褐色土・解褐色土・ヨーロップロック
13. 黑褐色土
14. 黑褐色土・ヨーロップロック・ヨーロップロック
15. 黑褐色土・ヨーロップロック・ヨーロップロック
16. 黑褐色土・ヨーロップロック・黒褐色土・わずかに~20、柱穴
17. 解褐色土・解褐色土・解褐色土・しまりあり
18. 黒褐色土・ヨーロップロック・解褐色土・柱穴
19. 黑褐色土・ヨーロップロック・解褐色土・柱穴
20. 黑褐色土・ヨーロップロック・解褐色土・柱穴
21. 黑褐色土・解褐色土・柱穴
22. 黑褐色土・ヨーロップロック・解褐色土・柱穴



Ph. 30 SK01 土層状況 (東から)



Ph. 31 SC07 東側ベッド・壁溝検出状況 (南から)



Ph. 32 SC07 北西 SC05 遺物出土状況 (東から)



Ph. 33 SC07 西側ベッド・壁溝検出状況（北から）



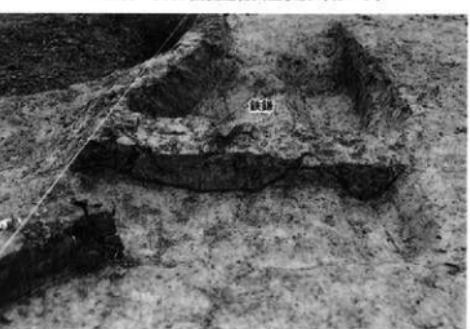
Ph. 34 SC05 西側遺物出土状況（南西から）



Ph. 35 SC05 西側遺物出土状況（北から）



Ph. 37 SC06 北側遺物出土状況（南から）



Ph. 38 SC06 西側遺物出土状況（南から）

のⅠB期とみられる。

・SC05 (Fig.18~20)

SC07 中央北側を切る、南北約4.1m×東西4.3mの不整隔丸方形のプランの堅穴住居。主柱穴は不明だが、当初よりなかった可能性が高い。主柱穴の有無で異なるが、規模と平面プランはSC02に類似する。当初の認識（先述）では、「SC03」の一部を含む。検出面から床面までの深さはSC07とあ



Ph. 39 SC01-06 挖り方掘削状況（南から）

Ph. 40 SC01 東半土層状況（北から）



Ph. 41 SC01 床面南側出土状況（北から）

Ph. 42 SC01 床面土坑(SK011)および遺物出土状況（東から）

まり変わらないか床面レベルがSC07よりわずかに低い程度。盛土によるベッド状造構が北西隅にあり、土間部の床面より10cm前後高い。床は貼床を施すが、SC07よりもやや薄い。細い壁周溝が廻るようだが、一部よく分からなかった。南側を切られるSC02西側中央床面で検出した東西の仕切り溝状のものは(SE03の南)、あるいはSC02の床面を下げるまでSC05の南辺の壁周溝を検出したものの可能性がある。床面では西壁寄り中央に90×70cmの不整構円形土坑があり、この土坑と周囲から一括土器が出土している(Ph.32,34,35)。他にも中央床面近くとベッド床面直上、北東部壁際から住居に伴いそうな土器片が出土している(Fig.18)。覆土中からも散漫に遺物が若干出土している。時期は、出土遺物を検討すると(Fig.39)、在来系(A系統)の土器が主体だが、その型式的位置や(特に甕Aの型式と高壺Aの接合技法)、甕Bの型式、またSC07(I期)とSC02(II期)との前後関係から、II A期(古墳時代初頭)に位置付けられる。比志・那珂遺跡群では、この時期の造構としては在来系主体の土器群となるのは珍しいものである。

• SC02,SC01 (Fig.18~20, Ph.29,39)

住居群中央で検出した東西4.3m×南北4.4mのやや不整な隅丸方形の平面プランの住居址。SC05を切る。SP222(東側)とSP006(西側)が主柱穴となる二本主柱の住居である。SC01は、前述の通り一見SC02を切るように見えるが、西側の壁はSC02の床面近くで初めて検出され、SC01の壁周溝とSC02の壁周溝は切り合いで不明瞭であり、特に南側と東側は一致してしまう。またSC01を独立の住居址とするにはやや不整形に過ぎるとみられる。また掘方の掘削の際も区別できなかった。したがつて、SC01はSC02と同じ住居と捉えたほうが良いと考える。その場合、SC02は北側と西側のわずかに高いベッド状造構部分となる。ただしレベル差は数cm(5cm程度)であり、特に西側はやや床面を下

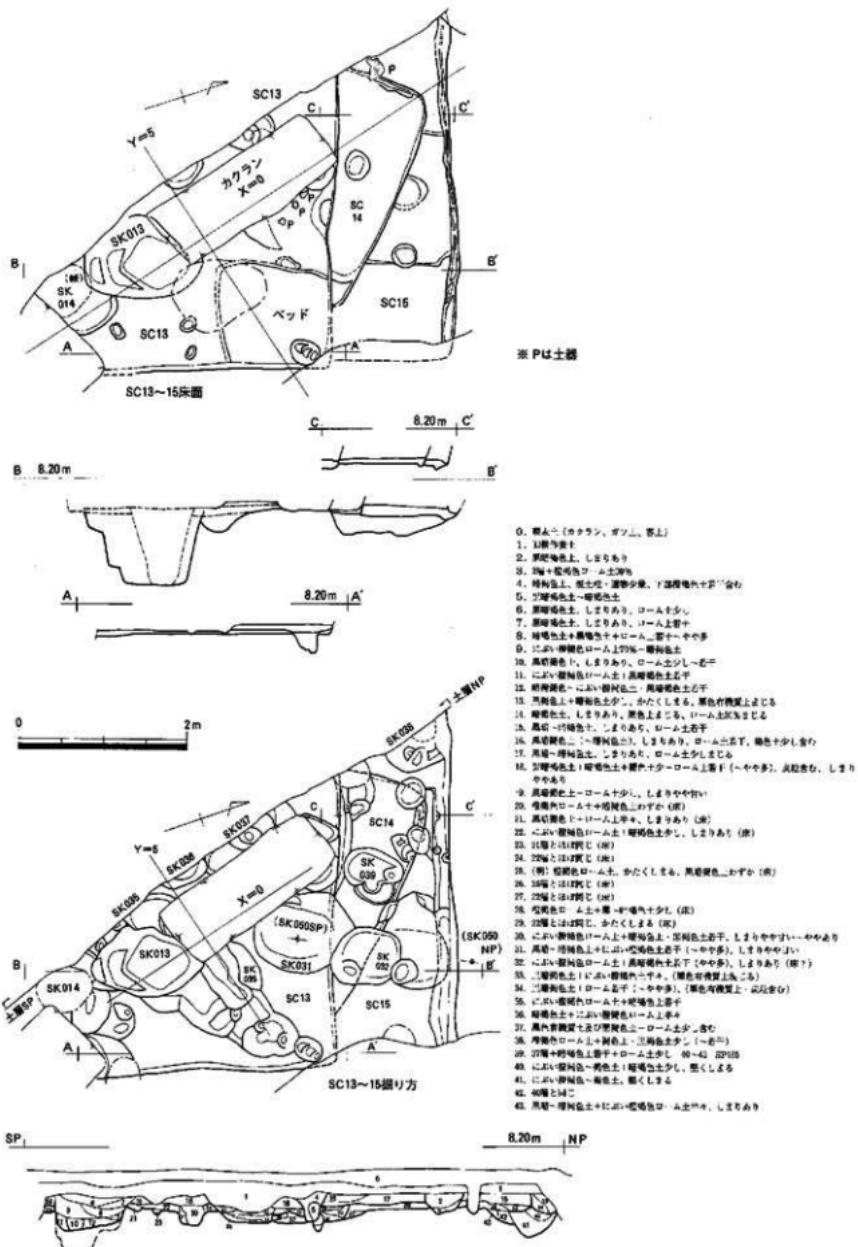
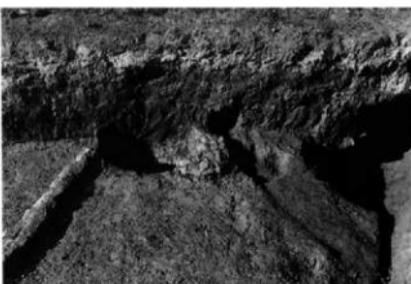


Fig. 22 SC13-14-15 平面図・断面図・土層図 (S=1/60)



Ph. 43 SC13～15 床面検出状況（南から）



Ph. 44 SC15 西側遺物出土状況（東から）

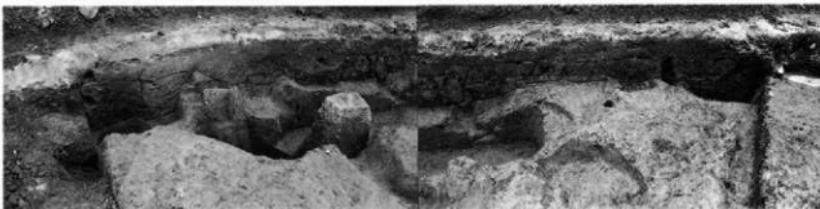
げ過ぎた感がありレベル差があまりなくなってしまった。土間部〔「SC01」がそれにあたる〕の床面レベルはSC07などより若干低い。中央床面には径90cm前後の土坑がある（SK011）（Ph.42）。また土間部、

ベッド部（SC02）ともに床面に浅い凹みやピットがいくつかある。壁周溝は全周する。土間部の北側、また不明瞭だが西側に仕切り溝がある。ベッド部西側には、西側壁周溝に平行して（ややずれるが）南北方向に仕切り溝がある。西側中央の東西の仕切り溝は前述のようにSC02に伴うものか不明である（この部分の床面を下げ過ぎているため）。遺物は、SK011の西側床面直上に遺存率の高い土器の胴部下半～底部が出土したほか、ベッド部西側南北溝の前後、ベッド部北側（石包丁も出土）、土間部北東部において床面直上の土器片が出土した。また土間部南辺と北東隅の床面直上に15×10cm前後の円礫（花崗岩ほか）がいくつか固まって出土した（Ph.41）。この礫群の性格は不明である。そのほか、覆土中からはやや散漫ながら、やや多くの土器片が出土している。

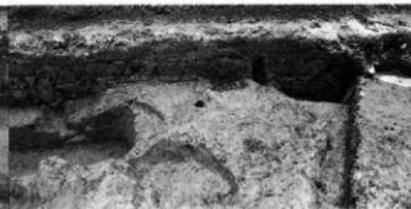
住居の時期は、便宜上 SC01 と SC02 を分けて記述するが、SC02 は出土遺物から（Fig.39）、在来系が目立つが小型丸底壺の形態から II 期とみられ、SC01 は在地系主体だが小型丸底壺や鼓形器台の型式から II 期とみられ（Fig.38）、また在来系甕 A も丸底であり矛盾しない。なお Fig.39-193 は周防系とみられる複合口縁壺であり注目される（Fig.38-157 は同一か）。なお SC02 北側床直上に石包丁（Fig.51-407）が出土しているが（立岩産か）、北部九州でも弥生後期後半までは石包丁は残るが、時期は古墳初頭であること、先行する SC07 に同じ機能の鉄製手摘鎌が伴うことから、混入とみたい。SC02 を含む中央住居群の覆土および掘方土中からは、住居の時期と無関係の弥生前期から後期後半までの土器片の出土も多く、その時期の遺構の存在も考えられることから、本来はそれらの時期のものであろう。

## （2）SC13～15(Fig.22、Ph.43)

調査区北西端で検出した住居群。削平が著しく検出面直下でベッド状遺構を検出し、また土間部床面



Ph. 45 SC13～15 西側調査区壁土層南半（東から）



Ph. 46 SC13～15 西側調査区壁土層北半（東から）

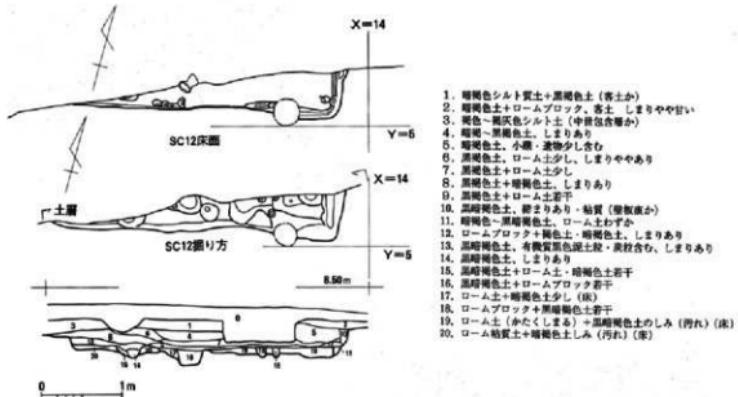


Fig. 23 SC12 平面図・土層図 (S=1/60)



Ph. 47 SC12 土層状況 (南から)



Ph. 48 SC12 掘り方掘削状況 (東から)

までも10cm前後しかない。また現場での住居番号に混乱があり、SC13は一部「SC18」としたり、SC15は一部「SC16」としたりしている。整理作業の過程でこれらは改めている。また3棟の住居が重複しているが、古い順からSC15→SC14→SC13である。時期は弥生終末から古墳初頭である。

#### ・SC15

東西4.0m以上、南北はSC13に重複し不明の推定長方形プランの住居址。SC14、SC13に切られる。北辺

に壁周溝がある。北東隅はわずかに一段高く、ベッド状遺構があったとみられるが、すでにベッド自体がすぐ検出されたので削平されていると考えられる。遺物の出土は少ないが、西側床直から変形土器が出土している(Ph.44)。主柱穴は不明。時期は、床直の出土遺物(Fig.42)から、弥生時代終末(I A~I B期)とみられる。

#### ・SC14

SC15を切り、SC13に切られる北西~南東辺2.75mの小型の住居址。SC13、SC15にはさまれる。

一時期方位が異なるようである。床面が浅く、残りが悪い。壁周溝が断続的に認められる(掘方まで掘削して一部明瞭となった)。出土遺物は少なく、時期を決める遺物はないが、前後関係から弥生終末から古墳初頭の一時期である。

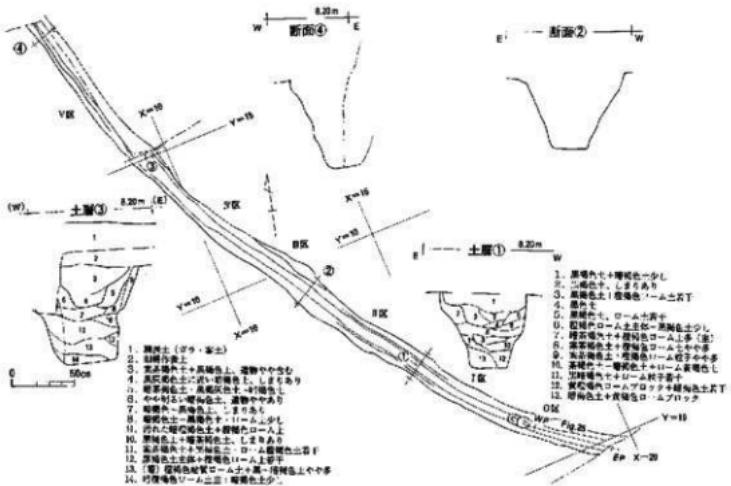


Fig. 24 SD02 平面図 (S=1/160)・断面図・土層図 (S=1/40)

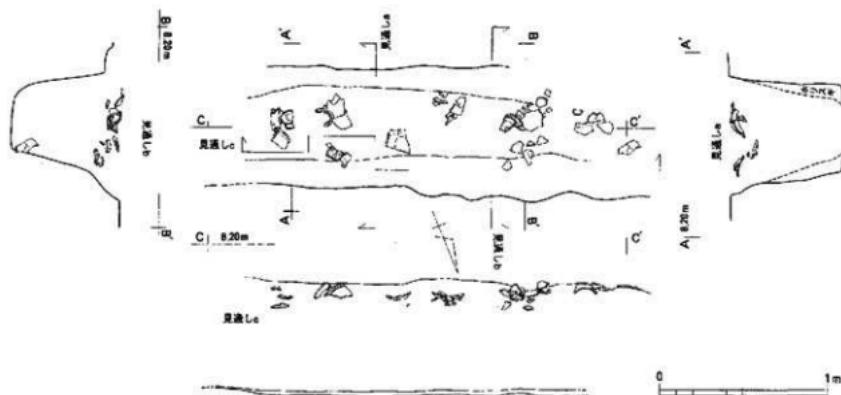


Fig. 25 SD02-0 区遺物出土状況図 (S=1/30)

• SC13

SC15、SC14 を切る東西 3.6m 以上 × 南北 3.6m 以上の住居址。中央を大きく長方形の搅乱で壊されているほか、検出面から土間部の床面まで 10cm 前後しかなく、残りは悪い（詳細は十層を参照。Fig.22 下、Ph.45,46）。また SB02 の SK014 に南側を切られている。ベッド状遺構が北東隅にあるが、検出面直下で床面となり、土間部床面との差は少なく上が削平されているか。調査区西壁寄り北側床面の SK037 は、中央から偏在するが焼土混じりの土があり、炉址または炉の近くであった可能性がある。SK013 は当初 SC13 との切り合いで不明であったが、掘っているうちに掘方が広くなってしまった。これはおそらく検出面直下の床面では柱痕跡ないし柱の抜き痕を検出し掘削したが、そのまま柱穴掘方（このプランは本来は掘方まで掘らないと全体が分からぬ）と一緒に掘削してしまったものと判断した。すなわちこれが主柱穴の一つと考える。おそらく全体のバランスから、これに対応する柱穴



Ph. 49 SD02-0 区遺物出土状況（北西から）



Ph. 50 SD02-0 区遺物出土状況（北東から）



Ph. 51 SD02 土層①（Ⅱ区南）断面状況（北西から）



Ph. 52 SD02 断面③（Ⅲ区南）断面状況（北西から）

が調査区外の西側にあり、二本主柱の長方形住居になると考えられる。なお貼床の下の掘方は土坑状の凹凸が多く認められる。

遺物は全体としてあまり多くない土器片が散漫に出土し、北側中央と調査区西壁際の床直から土器片が出土している。時期は、これらの遺物から (Fig.41)、在来系土器が完全に丸底化しており古墳時代初頭（ⅡA期）である。在来系主体であるのが特筆される。またSK13から手培り形土器の破片が出土した。

### (3) SC12 (Fig.23, Ph.47,48)

調査区北側中央、中央住居群の北側で検出した。東西3.6m前後（南北不明）の方形ないし長方形の住居。壁周溝が断続的に認められる。床面まで15cm程度しか残っていない。調査区北壁際に完形の器台形土器が出土し、この下には浅い土坑状の凹みが認められた。

遺物は比較的少ないが、床面中央で出土した器台から弥生時代終末（IA～IB期）であろう。

### 3) 溝状造構 (SD)

#### ・ SD01 (Fig.4)

調査区中央東側で検出。調査区南辺から北へN（以下磁北）-34° -Wの方向に走行する幅60~75cm、深さ10cm未溝の浅い溝。延長12.5mを検出し、さらに調査区外南へ伸びるか。一部浅いために、SC07の東辺と沿う部分では誤ってSC07の一部を掘ってしまった。北はSX01に切られそのまま終わる。時期は、出土遺物から (Fig.46)、13世紀代とみられる。

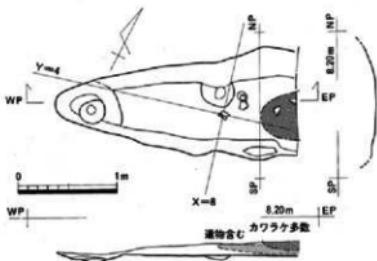


Fig. 26 SD05 実測図 (S=1/50)



Ph. 53 SD05 東半遺物出土状況 (西から)

• SD02 (Fig. 24, 25, Ph. 49~52)

調査区中央を縦断するように北東から南東にかけて走行する溝。延長23m検出し、調査区外の南北に延びてゆく。深さ60~80cm前後、断面はやや細い逆台形。溝の方向は、直線というよりは若干の弧を描き、北側ではN-33°-W、南側ではN-60°-Wである。溝底面のレベルは、北側の方が南側より約25cm低い。遺物は全体として散漫に出土しているが、集中的に出土したのは南側(0区)の上層のみである(Fig. 25, Ph. 49, 50)。溝の時期は、出土遺物(Fig. 46, 47)を検討すると、0区上層一括土器群の時期が須恵器のⅣ期最新相~Ⅴ期であり、溝の埋没は7世紀第3四半期に位置付けられる(須恵器の年代観は、久住猛雄2001「出土須恵器の編年とE-2・3号墳の築造・追葬の年代について」(『羽根戸南古墳群』福岡市埋蔵文化財調査報告書第661集)による)。溝の掘削は、中央住居群よりも新しいのは確かだが、詳しくは下層の遺物が少なく不明なもの、土師器の編年観などから、おそらく須恵器ⅢB期(6世紀第4四半期)~Ⅳ期(6世紀末以後)前半までの範疇と考えられる。

溝の性格であるが、最上層を除き遺物の顯著な出土があまりみられないこと、溝の断面が細い逆台形であること、土層を観察すると何度も掘り直しされたと考えられること、東側に約5mおいて方位を同じくするSB01があるが、この間は柱穴が少なくある時期空隙地であったと考えられることから、片側であるが道路状の空間の側溝と考えたい。6世紀後半から7世紀中頃にかけて、比恵・那珂遺跡群が全体として大型建物群の存在や直線的条溝の掘削など、特殊な状況に整備されるが(『那珂25』福岡市埋蔵文化財調査報告書第639集、『比恵29』福岡市埋蔵文化財調査報告書第668集)、この溝の掘削もそうした動きの一環と考えられよう。

• SD05 (Fig. 26, Ph. 53)

調査区北西部東側で検出。幅1.0~1.5m、東側で深さ25cm程度の浅い溝。西側は浅くなり途切れ、東側は調査区外へ延びる。方位はN-60°-E。東側上層にカワラケ(土師器の壺・皿)が多量に廃棄され、下層にも若干の遺物の出土があった。SE01構築を切るが、遺物はあまり変わらない時期ないしやや古いものがあり、あるいはSE01構築後、井戸作成後直しの時期までの間に掘削されたものかもしれない。時期は、出土した土師器の壺・皿の型式がSE01井戸上部大量廃棄と変わらず、14世紀中頃と考えられる(Fig. 48)。ただし、龍泉窯系青磁碗としたものはベトナム陶器の可能性もあり(森本朝子氏御教示)、それが正しければ若干下る年代かもしれない。

4) 土坑 (SK, SX)

土坑は20基前後検出した。この数にはすでに記述した住居址床面で検出したものも含み、大きめの柱穴もSKとしたので便宜上ここに含む。また掘削当初、井戸になるか土坑になるか不明のためSXとした遺構もここで報告する。以下では主要な一部の土坑を報告する。

• SK04 (Fig. 27, Ph. 54)

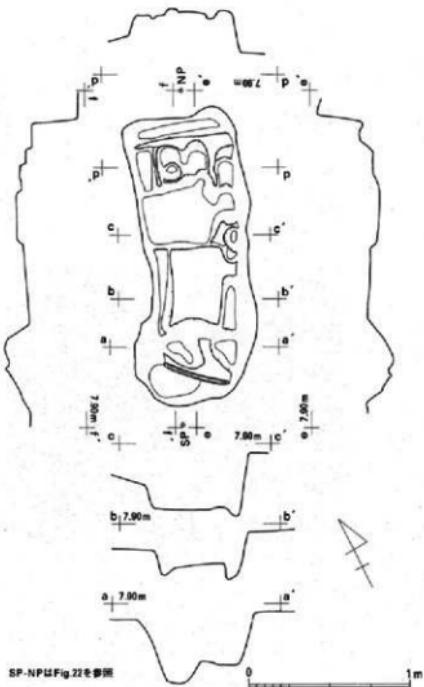


Ph. 54 SK04 土層状況（東から）



Ph. 55 SK050 実掘状況 (北から)

Fig. 28 SK050 (木槧墓?) 実測図 (S=1/30)



調査区西壁際中央南で検出したもの。はじめは南北 155cm × 東西 100cm の一つの土坑と考えて掘削したが、土層の観察の結果から、一辺 100cm 内外の柱穴が二つ重複しているものと判断した。中世の遺物（土師器小片）がわずかにあるのでこれが新しい方の柱穴に伴い、また弥生中期の遺物（須玖 I 式土器破片）がありこれが古い方の柱穴であろう。中世の方の柱穴は、3.5m 北側にある径 110cm の SK08 が類似する規模の柱穴であり、時期も 13~14 世紀の遺物を出土し、中世中頃の屋敷地の建物を構成する可能性がある。とすれば、憶測ながら柱穴の大きさから SE01 の時期の大型の建物であろう。

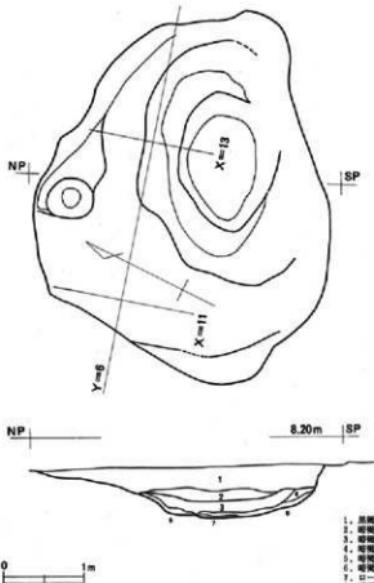
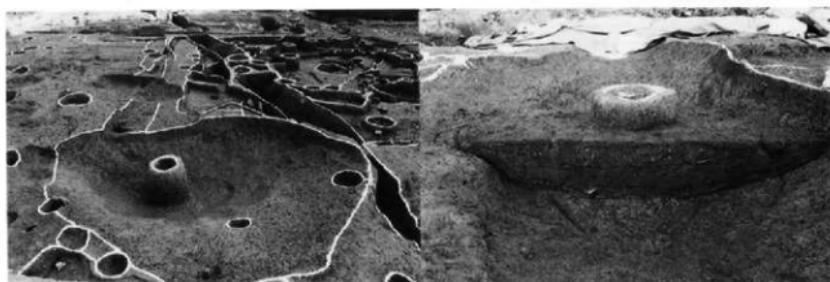
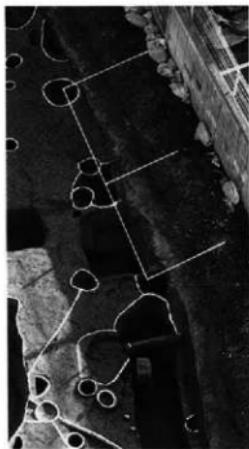


Fig. 29  
SX01 土坑平面図・  
土層図 (S=1/60)



• SK050 (Fig.28, Ph.55)

SC13~15 の重複部分の北東側下層で検出（図上のポイントについては Fig.22 参照）。東西 70cm × 南北 180cm の略長方形の土坑。横断面は、両側に板をはめ込んだような掘りこみがあること、縦断面も、南側底面に掘り込みがあり、北側も不明瞭ながら溝状の掘り込みがあることから、本来はこれらの壁際の掘り込みに板をはめ込んだ木棺墓ではなかったかと考える。はじめ住居址に伴う土坑と考えていたためと（住居址の貼床の土とこの土坑の覆土の区別が不明であった）、調査の終盤で時間がなかったという理由で、土層ベルトを残さずに一気に掘ってしまい、木棺墓であることの確証は得られていない。しかし調査区周辺では（Fig.2 参照）、50~60m 離れるが那珂 4 次・31 次調査において弥生前期から中期初頭の甕棺墓や木棺墓が検出されている。SK050 の覆土中からも小片で國化していないが弥生前期後半の土器があり、当該期の墓地群がここまで延びていたと考えてもよいであろう。



Ph. 58 SB02 検出状況（北から）

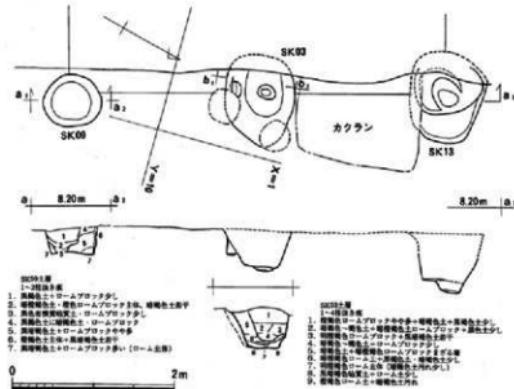


Fig. 30 SB02 平面図・断面図・土層図 (S=1/60)

#### • SX01 (Fig. 29, Ph. 56, 57)

調査区中央北側で検出。中央住居群、SD02、SD01を切る。当初は規模から井戸の可能性を考えたので、「SX」と仮称していたがそのまま遺構番号とする。南北3.7m×東西4.5mの不整円形の土坑。検出面からの深さは60cm前後。立ち上がりは、北と西側は緩やかで途中でテラス状となる。土坑の中心は南東に偏り、下部は径2.2×3.0mの楕円形の土坑となる。遺物の出土は少くないが、廃棄土坑と呼べるほど大量のものは無く、土坑の性格は不明である。時期は、出土遺物から (Fig. 45, 46)、14世紀の幅内であろう。SE01の時期より若干新しいのか。建物の土壁が焼けたようなスサの入ったような焼土塊 (Ph. 82, 83) が若干出土しているのも注目される。

#### 5) 掘立柱建物 (SB)

掘立柱建物は2棟について報告する。調査区全体としてかなり多数の柱穴を検出したが、確実に建物が復元できるのは数棟である。柱穴については、調査時に一つ一つの覆土の色調や質を観察し、また整理作業において遺物を検討し、各柱穴の時期をチェックしてそれをもとに柱並びを検討したが、あまりうまく行かなかった。出土遺物や覆土の特徴から、

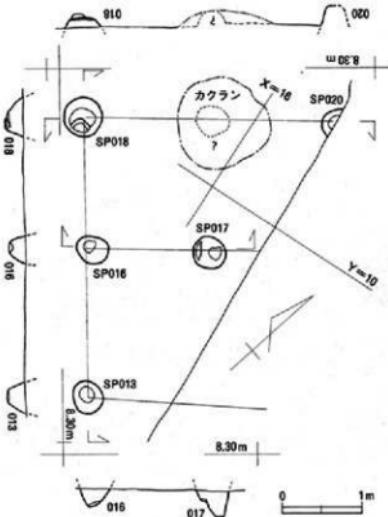


Fig. 31 SB01 実測図 (S=1/60)



Ph. 59 SB01 検出状況（北から）

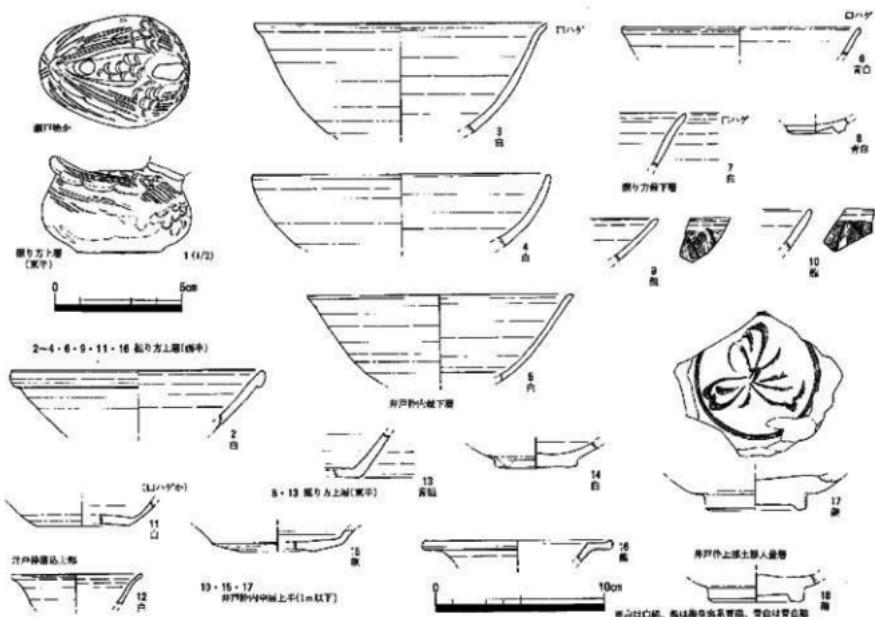


Fig. 32 SE01 出土陶磁器 (S=1/2, 1/3)

柱穴の半数以上は中世に属すと考えられるが、これらは比較的浅く小さいものが多い。また擾乱が多いので、本来建物を構成するべきこれらの比較的浅い柱穴が抜け落ちているために中世の建物がなかなか復元できないようである。弥生時代から奈良時代の柱穴は黒色から暗褐色を呈する覆土が多いが、これらは調査区北西部と南部中央（中央住居群から南側）にある程度のまとまりがあるが、擾乱や中世遺構に阻まれ建物の復元に至らなかった。

#### • SB01 (Fig. 31, Ph.59)

調査区東側中央で検出。建物の一部は調査区外となる。1×1間、東西3.2×南北3.5m。N(磁北)-46°-E。柱穴の覆土は暗褐色ないし黒褐色。一部の柱に奈良時代の土器の小片があり、これを下限とする時期だが、方位がSD02には平行し、7世紀代の可能性を考えたい。

#### • SB02 (Fig. 30, Ph.58)

調査区西縁沿いで検出した、南から SK09, SK03, SK14 の三つの柱穴からなる。建物は調査区外の西側に展開するのであろう。南北4.6m(東西不明)、N-39°-Wの方位である。柱穴掘方は径70cm以上、1m前後を測り、柱痕も径20cmを測りしっかりしている。時期は、SC13(古墳初頭IIA期)を切ることと、出土遺物に古墳初頭の土器があることから II A ~ II C 期の範囲であろう。

### 3. 出土遺物 (Fig. 32~61, Ph. 60~94)

紙幅の都合により、以下、各遺物についての詳細な記述説明ができないことを御寛恕して頂きたい。これは、限られた紙面ながら、できるだけ多くの遺物を図示しようとしたためである。また那珂遺跡群では、後世の地形的変化により、より古い遺構が失われていることが多いが、遺構に伴う時期の遺物でなくても、遺物を示すことによりこの地区に本来はその遺物の時期の遺構があったことを想定す

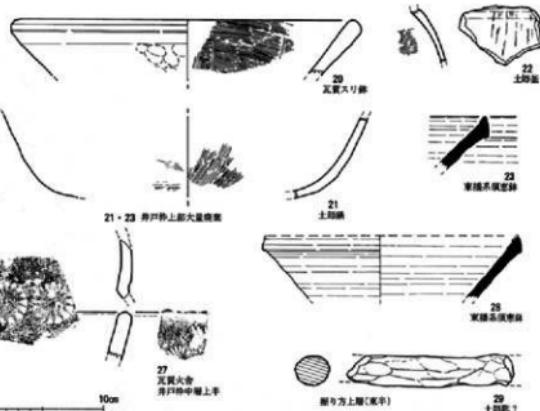
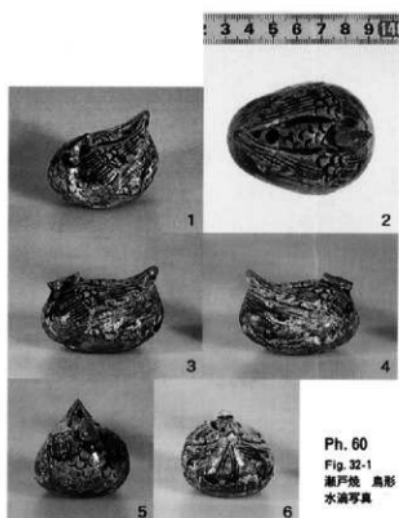
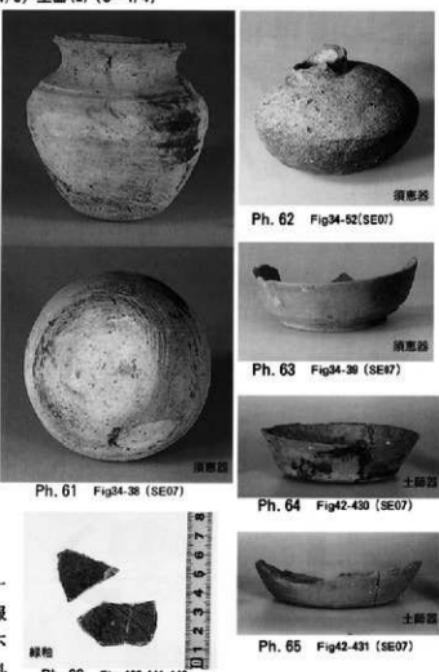


Fig. 33 SE01 出土陶器 (S=1/3)・土器(2) (S=1/4)

Ph. 60  
Fig. 32-1  
蒸戸焼 鳥形  
水滴写真

る必要があることを強調するねらいもある。ただし一方で、SE07 の完形に近い土師器一括は写真のみの報告となり、また SE01 の土師器の坏・皿に関しては不十分な報告となってしまった。今後、機会を得て資料紹介したいと考えている。お許し頂きたい。各遺物の時期や分類については以下の文献を使用する。

弥生終末～古墳前期については久住猛雄 1999 「北部九州における庄内式土器群行期の土器様相」

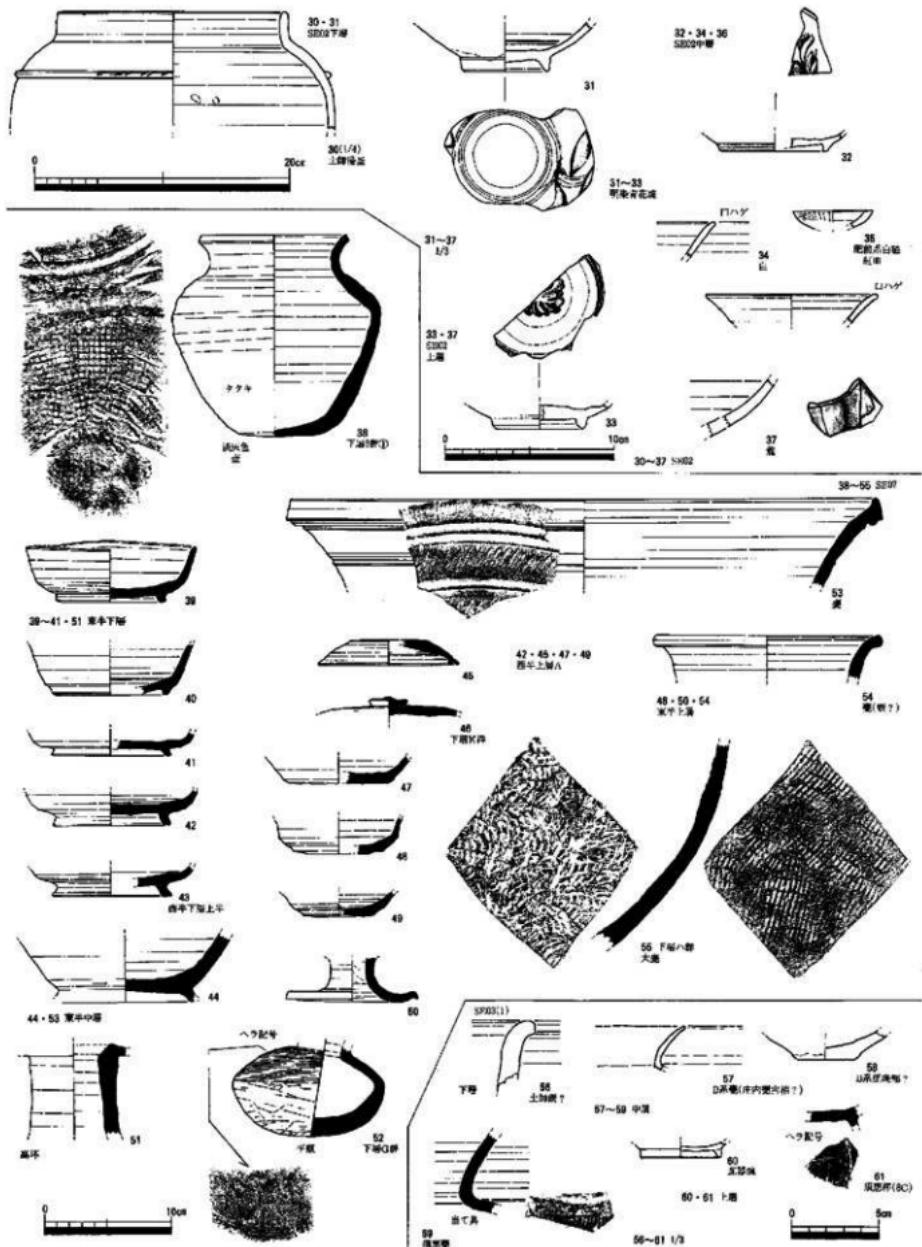


Fig. 34 SE02-SE03(1)-SE07 出土土器・陶磁器 (S=1/4, 1/3)

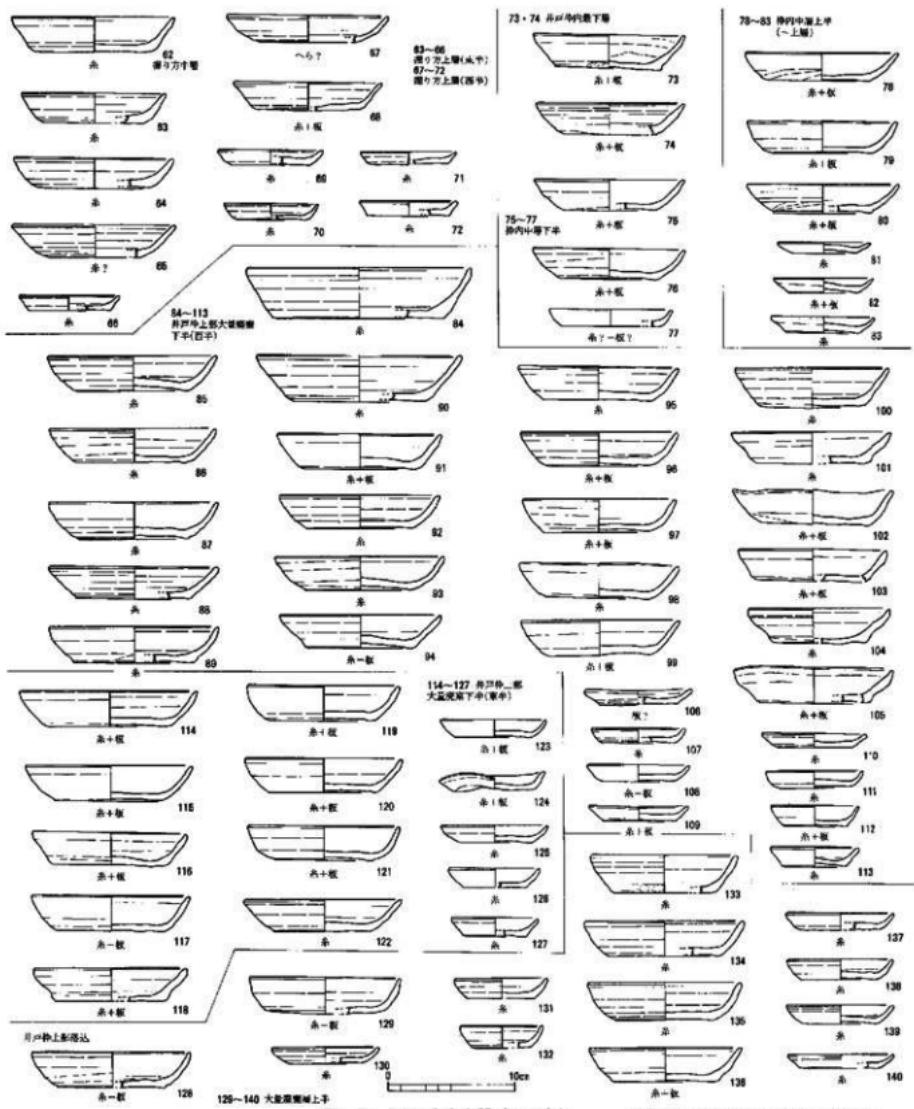


Fig. 35 SE01 出土器 (S=1/4)

赤系は赤切引、ヘタはヘラ切引、?は不明。底は板瓦止め

(『庄内式土器研究』)を、中世の陶磁器については最新の大宰府史跡分類を用いる(山本信大ほか2000『大宰府条坊跡』XV-陶磁器分類編-、太宰府市教育委員会)。また陶磁器については、道宜博多分類も参照する(森本朝子1984「博多出土貿易陶磁器分類表」福岡市埋蔵文化財調査報告書第105集)。また挿図には、

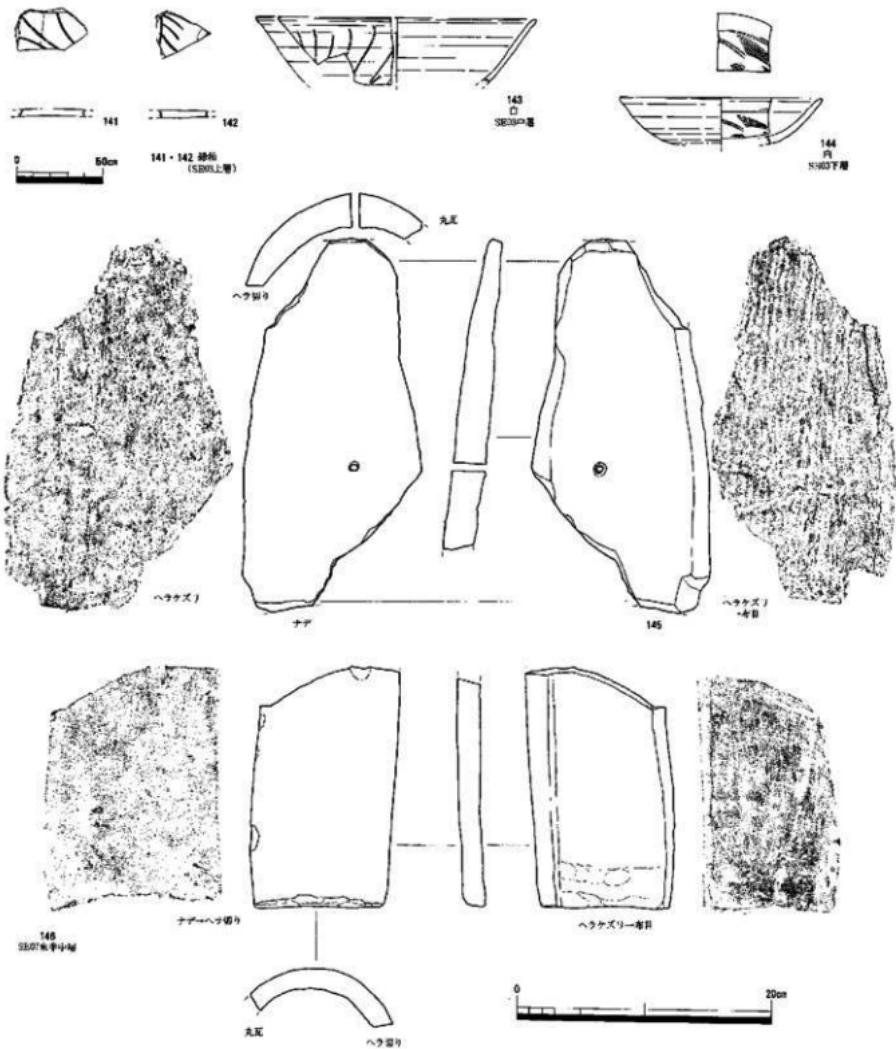


Fig. 36 SE03 出土陶磁器 (S=1/3), SE07 出土瓦 (S=1/4)

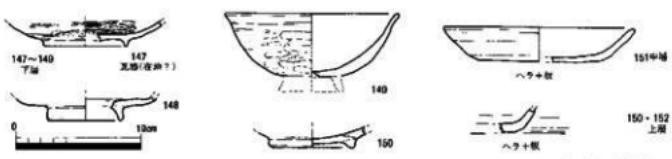
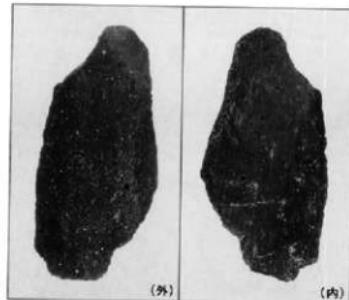


Fig. 37 SE03 出土土器 (S=1/4)



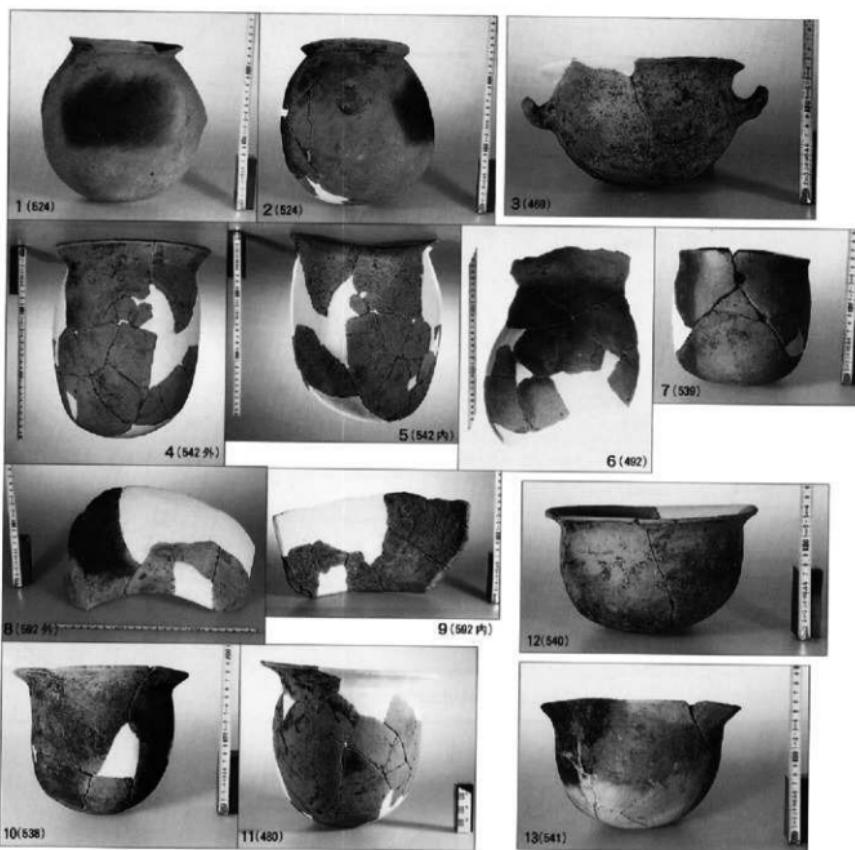
Ph. 67 Fig38-145 (SE07)



Ph. 68 Fig38-146 (SE07)



Ph. 69 Fig42-432 (SE07)



Ph.70 (1~11) SE07出土土器補遺 (1) 占( )内は整理作業番号  
1~6、10~13は甕(鍋)、7は鉤底、9はカマド

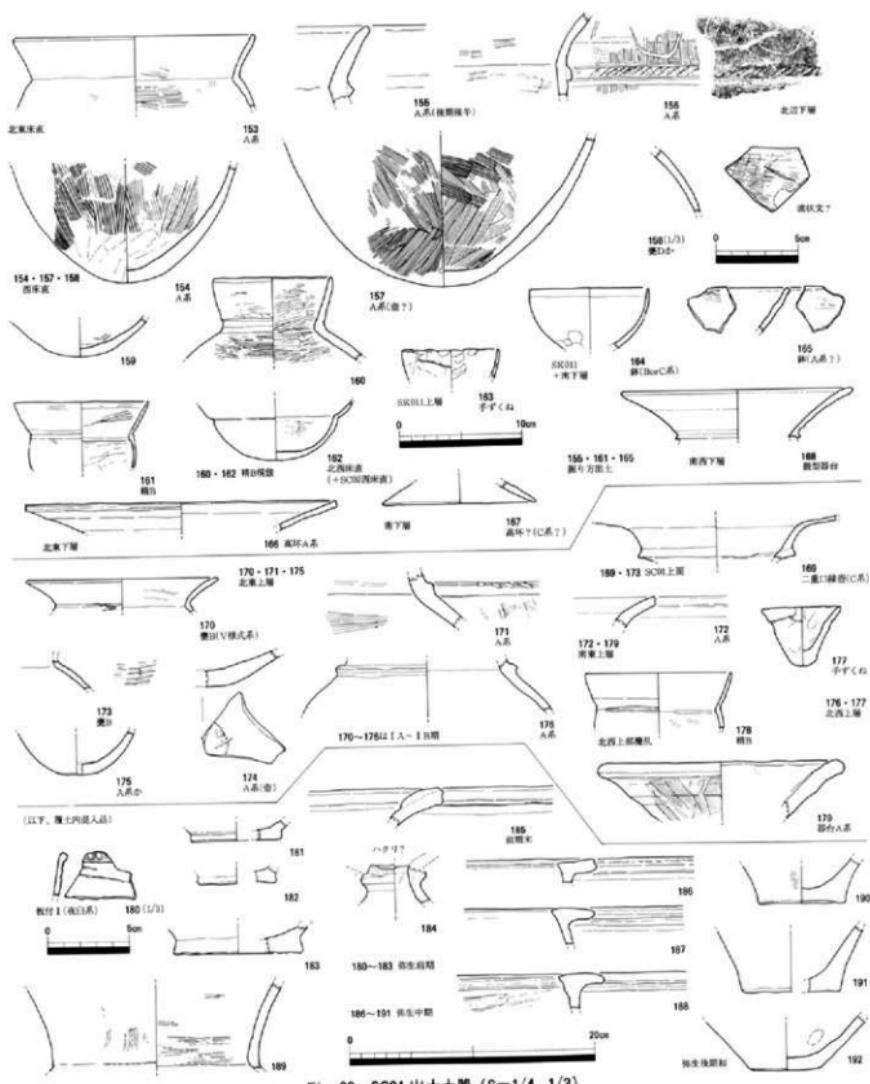
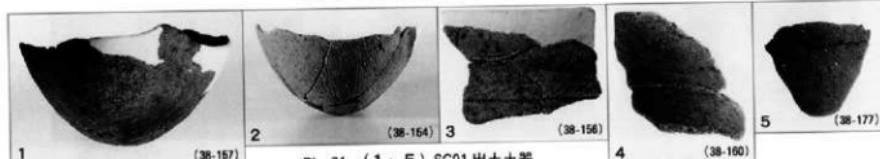


Fig. 38 SC01 出土土器 (S=1/4, 1/3)



Ph. 71 (1~5) SC01 出土土器

※ ( ) 内はFigに対応

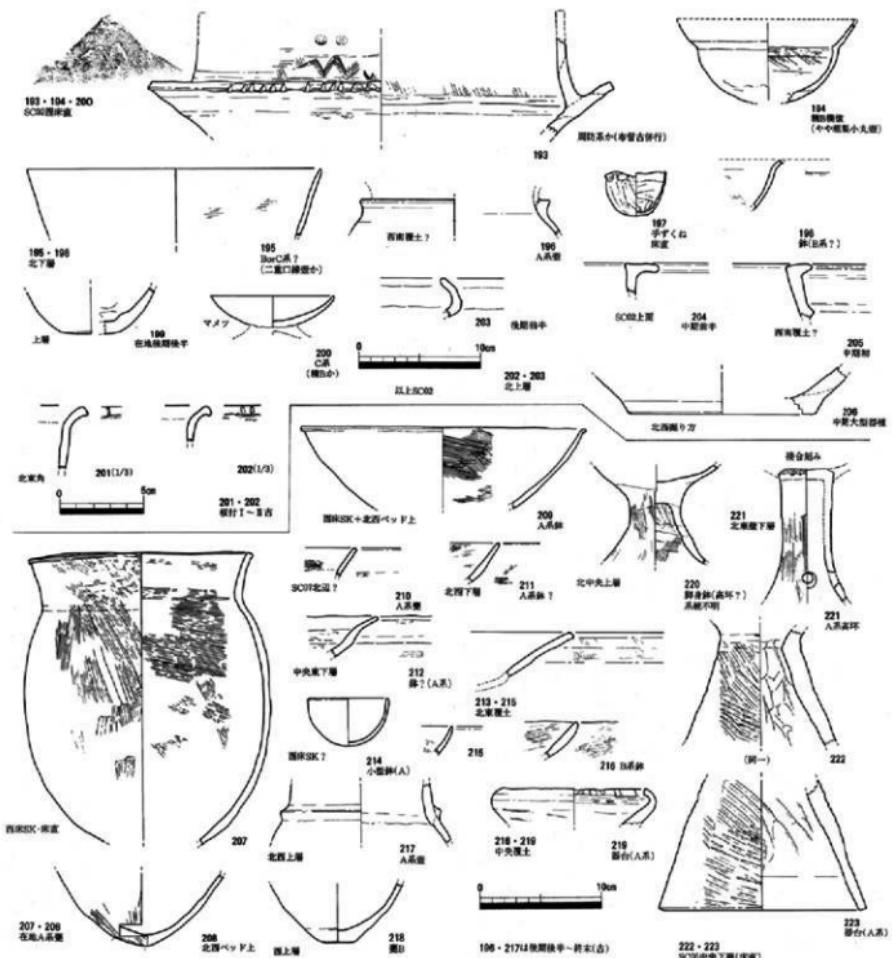


Fig. 39 SC02・SC05 出土土器 (S=1/4, 1/3)

出土遺構や層位についても記入した他、各個体の下や脇に分類名称や一部の調整について写植で表わした。土師器の壊・皿では、「糸」は糸切り底、「ヘラ」はヘラ切り底、「板」は板目圧痕を表わし、陶磁器では「龍」は龍泉窯系青磁、「白」は白磁である。なお中世の遺物については大庭康時、森本朝子、田中克子の御教示を得た部分があるほか、韓半島系瓦質土器については申敬徹、武末純一の御教示を得た。また石器・石製品について



Ph. 72 Fig 39-193 (SC02)

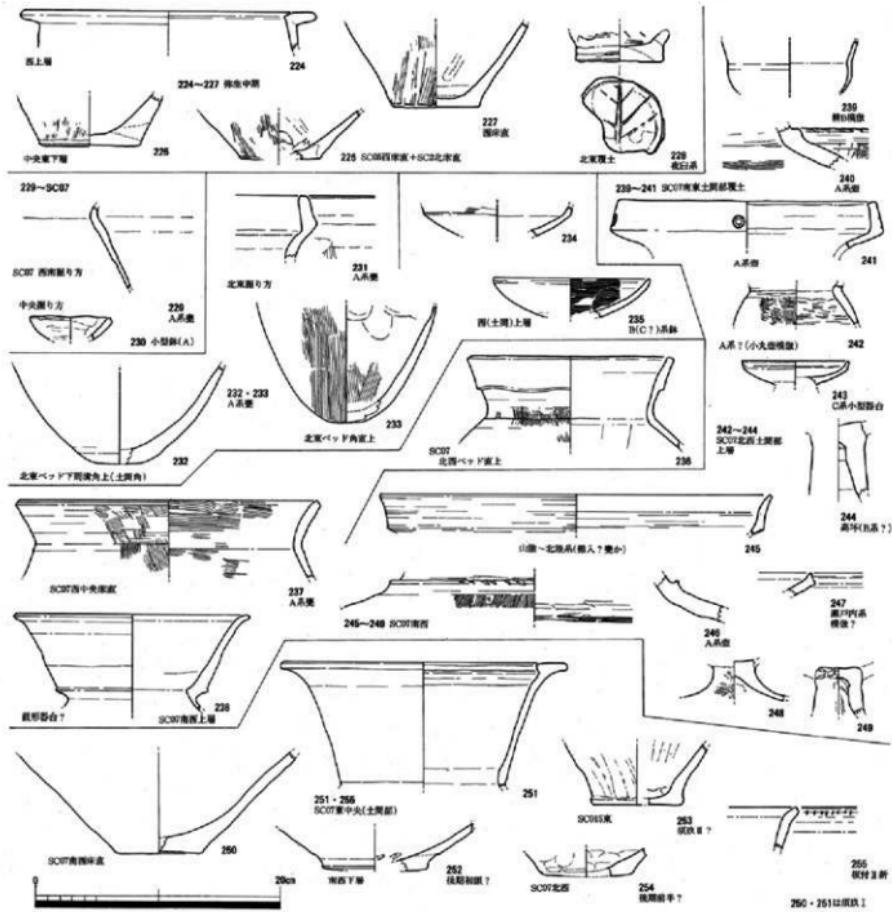


Fig. 40 SC05 (2), SC07 出土土器 (S=1/4)



Ph. 73 Fig 39-207 (SC05)

は吉留秀敏の御教示を得たほか、剥片石器については図化と原稿をお願いしている。記して感謝申し上げたい。以下、主要な遺物や問題となる遺物についてのみ記述説明し、概観する。

Fig.32~33はSE01の出土の陶磁器。1は瀬戸焼の鳥形の水滴とみられる(Ph.60)。鉄釉・灰釉のかかったやや軟質の陶器で、釉薬は緑褐色不透明、胎土は淡茶灰色~淡黄茶色を呈する。底部は糸切り。2はIV類の、3,7は口禿で類の、4はII類の、5はV類の白磁碗。9,10,13,15~18は龍泉窯系青磁。9,10はII-b類の碗。17はI~6類の碗。16はIII~3類の壺。15はI~1類の皿。11は白磁皿IX類。

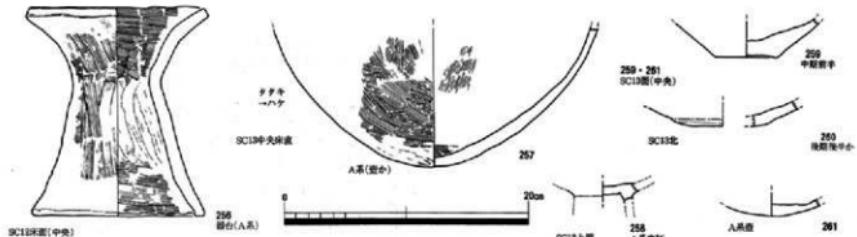


Fig. 41 SC12・SC13出土土器 (S=1/4)

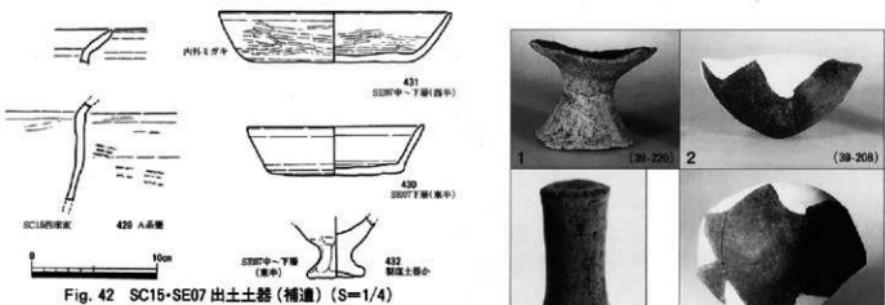
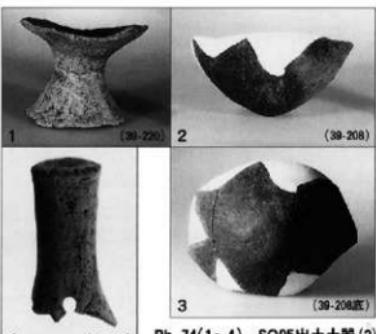
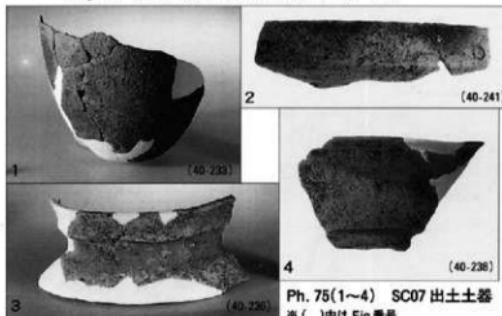


Fig. 42 SC15-SE07出土土器(補遺) (S=1/4)



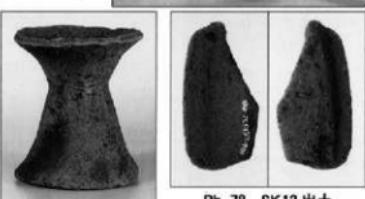
Ph. 74(1~4) SO05出土土器(2)



Ph. 75(1~4) SC07出土土器  
※( )内は Fig番号

18は白磁小碗で薄手の作り。19は陶器摺鉢だが備前か。  
24,25,27は瓦質土器で、奈良火鉢の浅鉢Ⅰ式か。これらの遺物の時期は、一部古いものを含むが、13世紀後半から14世紀中頃のものであろう。なお29は土師質で鉢など  
の柄か。Fig.35はSE01出土の土師器の坏・皿。井戸枠上部落込みの大量廃棄には因化可能なものが  
この4倍はある。掘方出土(62~72)と井戸枠および上部落込み出土(73~140)の間でわずかな型式  
差があるか。後者は立ち上がりが内湾傾向のものが多い。また途中で屈曲する立ち上がりのものが見  
られる。また後者には13.5cm以上の大きめの口径をなすものがある。前者は13世紀後半~末、後者は  
14世紀前半~中頃であろう。これらは13~14世紀の土師器編年年の指標となりうる資料である。今後検討  
したい。Fig.34~30~37はSE02出土。31~33は明代後期の染付(青花)碗。33は皿の可能性もある。

Ph. 76 (SC13)  
Fig 41-257



Ph. 77 Fig 41-256 (SC12)



Ph. 78 SK13出土  
手造り形土器(Fig 44-277)

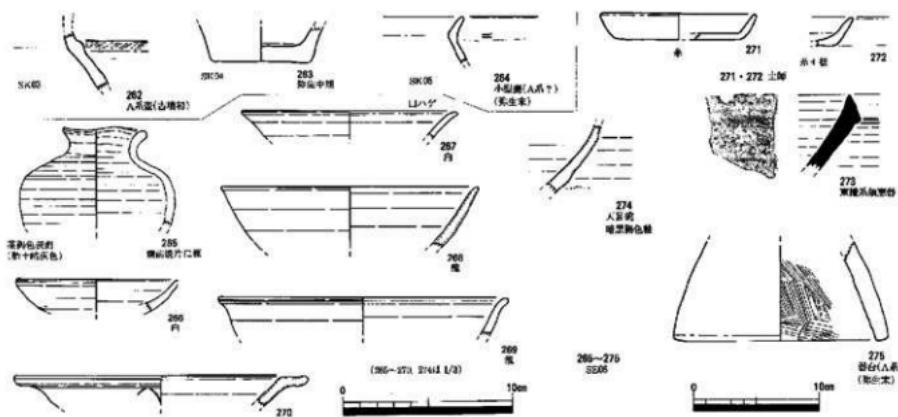


Fig. 43 SK03~05, SE06 出土器・陶磁器 (S=1/4, 1/3)

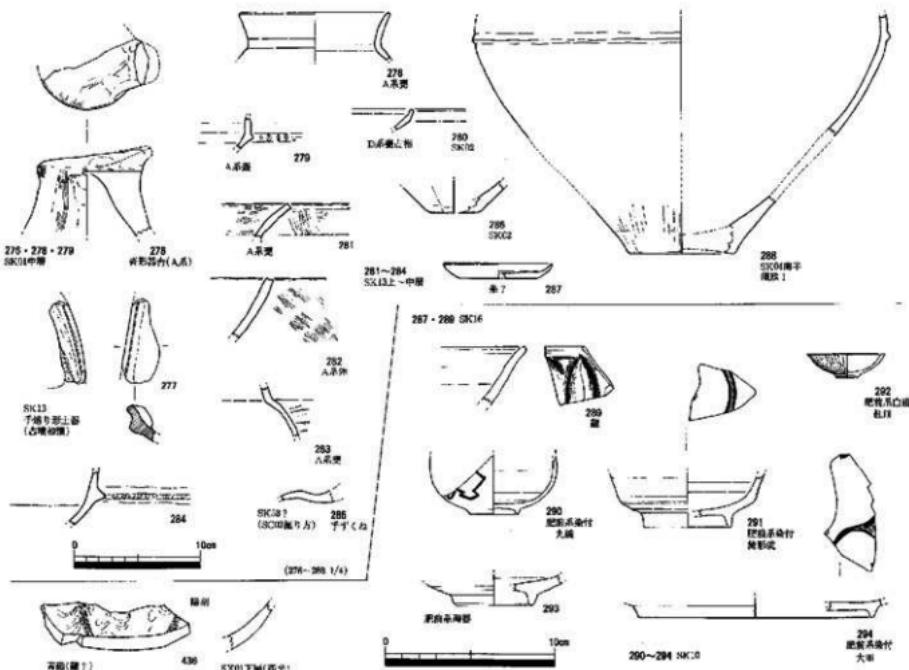


Fig. 44 土坑ほか出土土器・陶磁器 (S=1/4, 1/3)

16世紀後半か。Fig.34-38~55はSE07出土の須恵器。38は焼きが甘く淡灰色～灰白色だが、雰囲気的に牛頭窯のものではなく、地域外からの搬入か(Ph.61)。53は精緻な複線の横描波状文が口縁部に

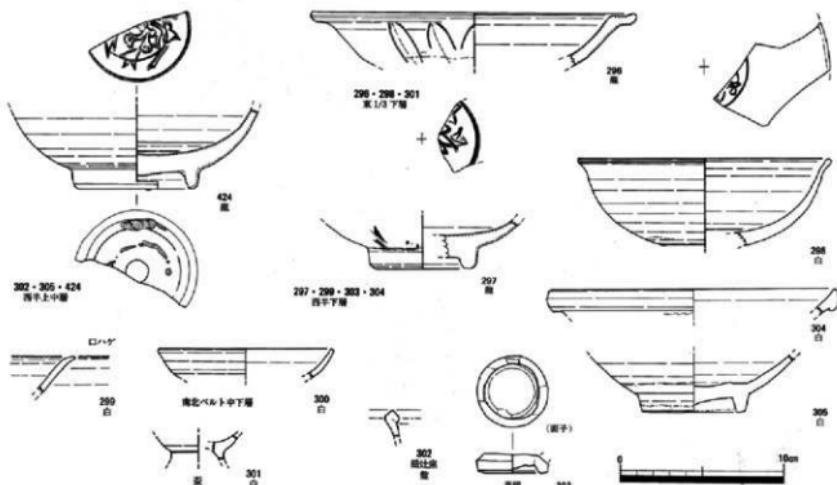
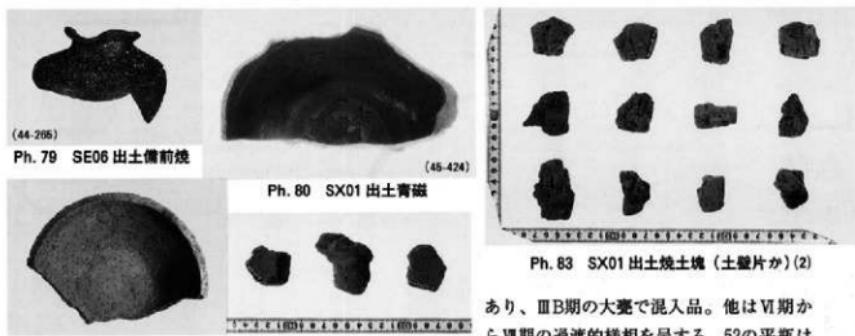


Fig. 45 SX01 土坑出土陶器 (S=1/3)



た50の小型高杯もふつうVI期まである。51の高杯はVII期にみられる。52の平瓶はVI期からVIII期の過渡的様相を呈する。53の平瓶はVI期からVII期まであり得る。また54の壺類では、41~43がVI期的、39,40がVII期的である。しかしこれらは遺存率も高く、土器器とともに一括して出土している。このような前後する型式が共存する過渡期の様式(期)とみるべきか。ここでは山村信榮1995「8世紀初頭の諸問題」(『大宰府陶磁器研究・森田勉氏追悼論文集』)の「E期」と捉え、歴年代は議論があるが8世紀第1四半期と考える。Fig.42~430,431はSE07の土師器の壺。431はミガキを施し8世紀初頭~前半でよいが、430はミガキは無さうであるので一見新相である。なお432は製塩土器であるが脚台部の付く型式であり、古墳時代前期か。分厚い作りで在地の変容品であろう。今回図示できなかったSE07出土の土師器の壺・瓶などはPh.70,71に示した。いずれ機会をみて紹介したい。型式(様式)的には、田崎博之1980「干潟遺跡出土土器の編年」(『干潟遺跡I』福岡県文化財調査報告書第59集)におけるII式からIII式Aの土師器に類似する。SE07の須恵器の型式も干潟遺跡編年ではII式からIII式Aの様相で矛盾しない。やはり土師器からも須恵器のVI期からVII期の過渡期の土器群のようである。

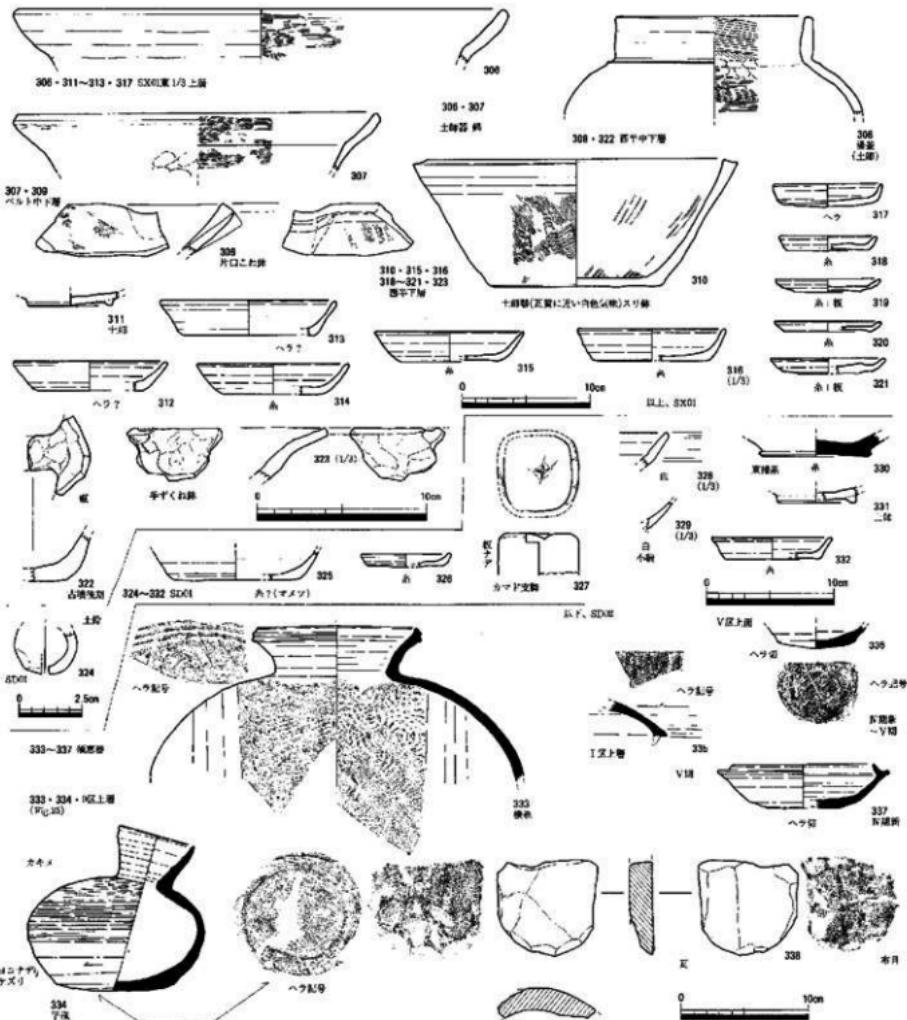


Fig. 46 SX01・SD02・SD01 出土土器・瓦 (S=1/4, 一部 S=1/3, 1/2)

Fig.36-141~143はSE03出土の陶器。141,142は博多分類陶器A群IV類の縁軸盤。143は白磁碗V-2b類。144は白磁碗VI-1b類。これらは11世紀後半から12世紀前半で、Fig.37やFig.34-60などの他の遺物と矛盾しない。

Fig.38はSC01の出土土器。在米系(A系統)主体だが、一部の混入品を除いてII B期である。鼓形器台や小型丸底壺の型式はII A期以降。このような在来系主体のセットはII A期にはいち早く畿内系主体となる比恵・那珂遺跡群では珍しい。156はA系大壺だが、突帯は扁平で時期は矛盾しない。口縁部にヘラ挿がある。その他、弥生前期から中期の遺物がある(180~192)。この時期の遺構が本

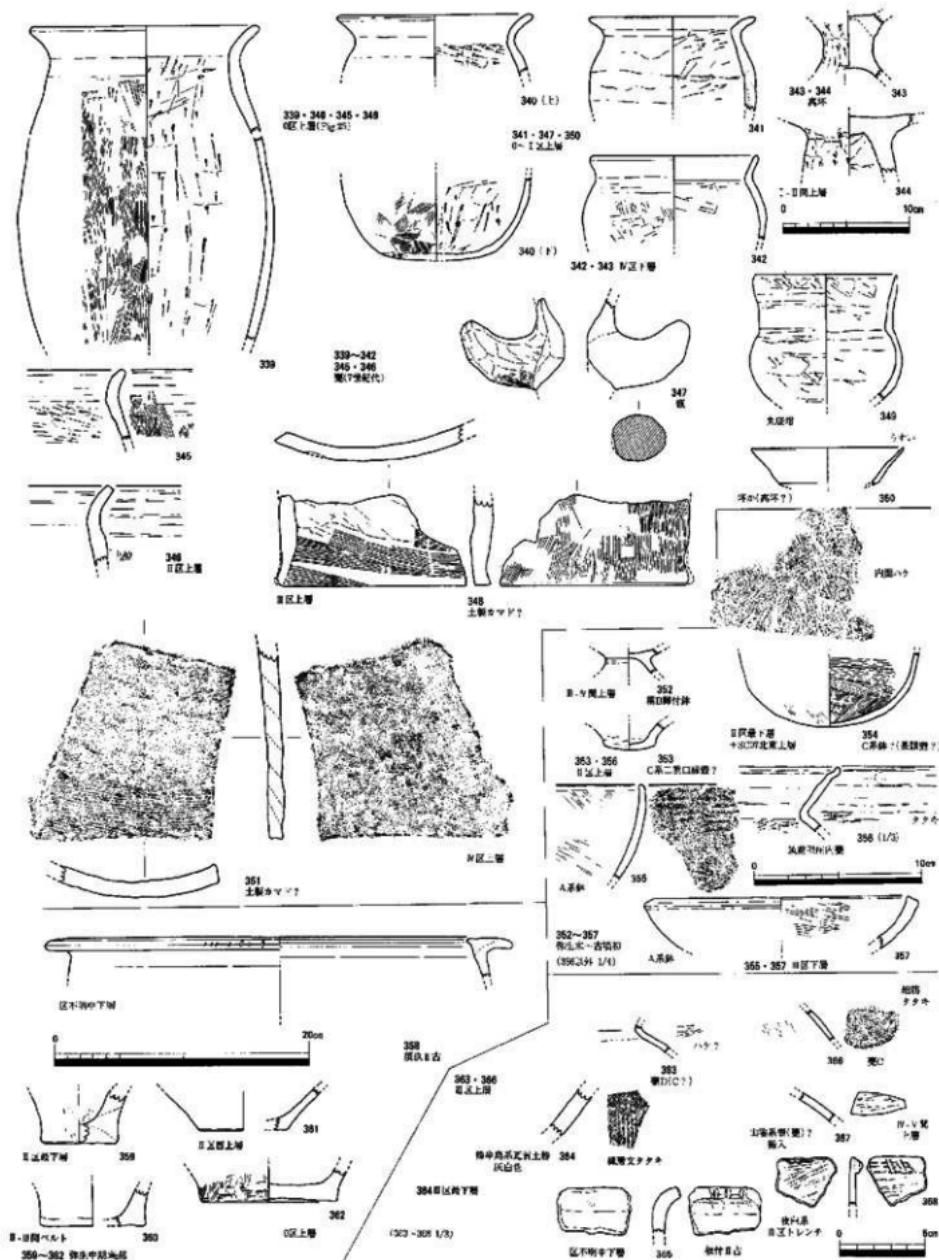


Fig. 47 SD02 出土土器 (S=1/4, 1/3)

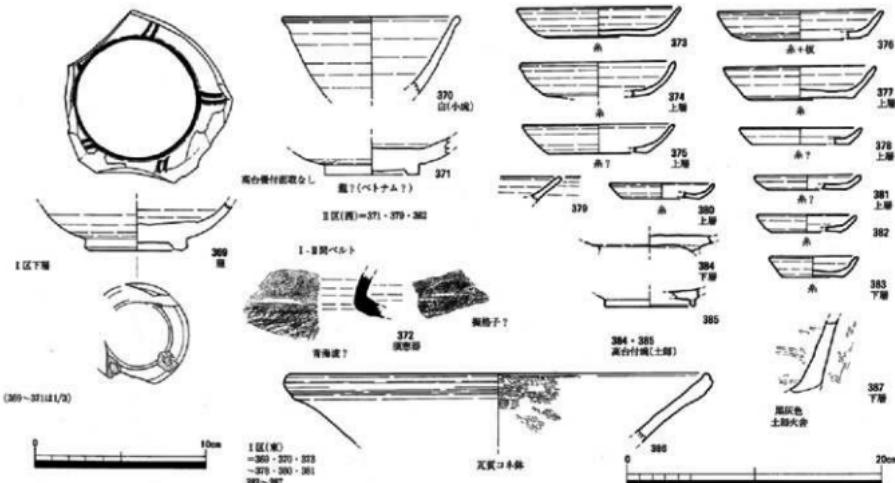
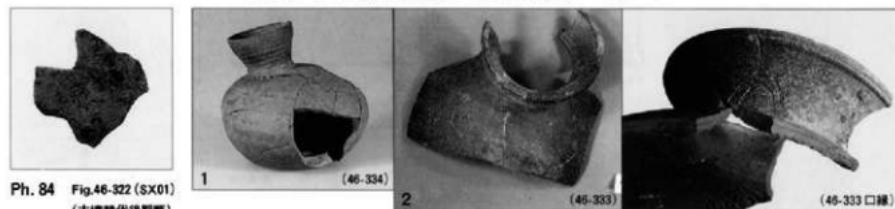
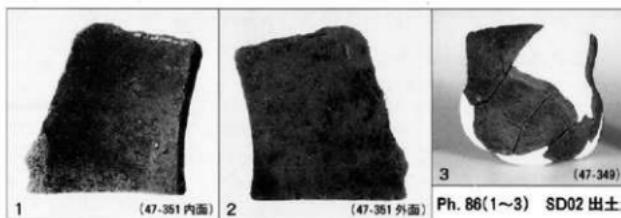


Fig. 48 SD05 出土陶磁器 (S=1/3), 土器 (S=1/4)



Ph. 85(1~3) SD02 出土須恵器



Ph. 86(1~3) SD02 出土土師器



来はあった可能性があるので意図的に図示した。Fig.39~193~206はSC02出土土器。このうち住居の時期を示すのは193~195,200である。193は複合口縁壺だが、筑前地方中部の形態ではなく、鈎状に突出する一次口縁部や口縁部文様の連続山形状の櫛描波状文と竹管文、一次口縁部端面の押圧状の刻みなど、要素的には類似品が周防（山口県）にある。ただし胎土は在地の可能性もあるが、花崗岩粗粒が多く、白雲母を含み搬入品の可能性が高い。194は162（SC01）とともに、小型丸底壺の形態だが、胎土や調整が典型的ではないもので、また器壁もやや厚く、C-D系統に伴う「精製器種B群」（次山淳1993「布留式土器における精製器種の製作技術」『考古学研究』第40巻第2号）を在地的技法体系で模倣したものである。161（SC01）は精製器種B群である。203は弥生後期前半の、204~206は弥生中期初頭~中頃の、201,202は弥生前期初頭の土器であり、周間にその時期の集落が存在した

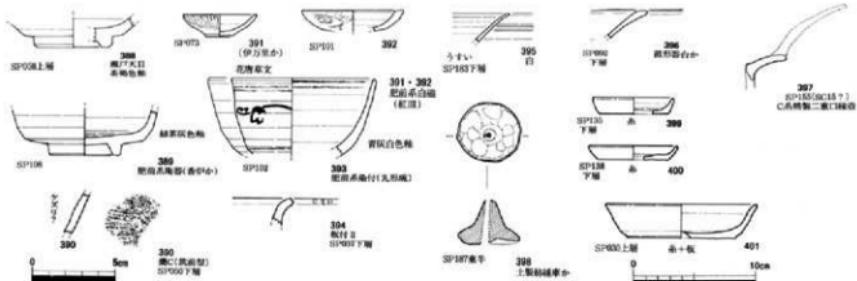
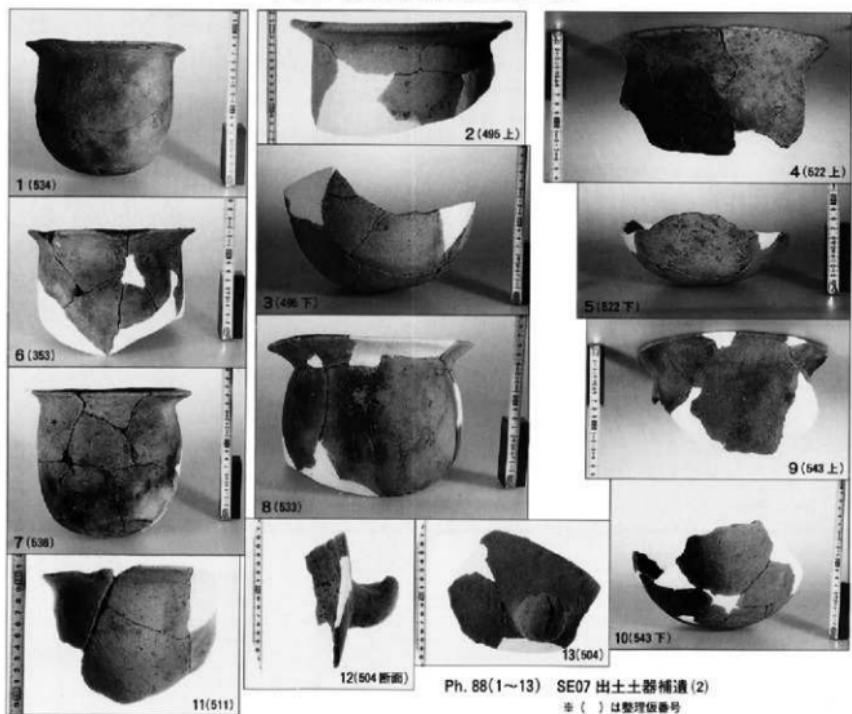


Fig. 49 ピット出土土器・陶磁器 (S=1/3, 1/4)



Fig. 50 掘出時・攪乱等出土遺物 (S=1/4)



Ph. 88(1~13) SE07 出土土器補遺 (2)

左( )は整理後番号

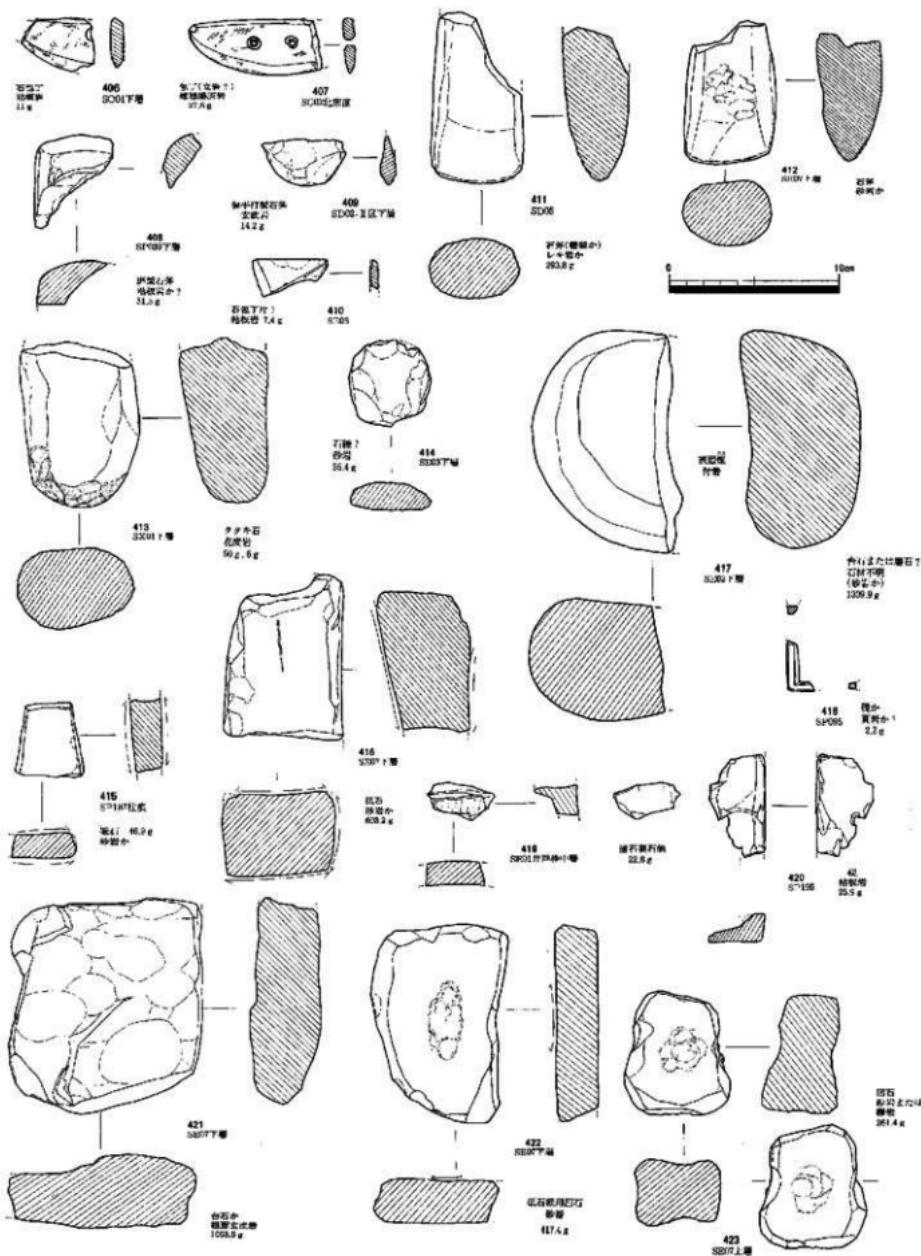


Fig. 51 各遺構出土石器・石製品 (S=1/3)

可能性を示す。Fig.39-207~223はSC05出土土器。207は丸底になることが予想され、小レンズ底も残るが(208)、II A期のセット。218は平底風だがB系統であり問題ない。221は高壺Aだが、管見では壺部との接合にこのような刻みを施すのはII A期以降であり、精製器種B群の高壺や小型器台の影響か。220は脚付鉢(高壺?)だがあるいは肥後系ないし有明海沿岸系の可能性がある。胎土は在地でもよい。Fig.40-224~228もSC05出土だが弥生前期~中期の混入品。須玖I式が目立つ。Fig.40-229~249はSC07出土土器。床直ないしそれに近い下層出土の232~234,236,237が住居に伴う。232,233の壺Aは小レンズ底の段階であり、I B期である。234はC系の精良胎土の有段高杯だが比惠・那珂遺跡群ではI B期より存在する。236はA系系統技法だが、外觀上山陰系壺などの影響を受けている可能性がある。掘方出土の229,231もI B期でよいだろう。覆土出土土器は明らかに新しい型式もあるが(238,239)、235,240~242,244~246は伴う可能性がある。243は受部立ち上がりがわずかの古い型式の小型器台で、次のII A期の可能性もあるがI B期でもありうる。245は北陸西部系ないし山陰系。胎土が精良で石英と流紋岩?の微細粒を含み搬入品か。時期的には北部九州の弥生終末に併行して問題はない。247は弥生後期後半からI A期にみられる瀬戸内西部系壺の横微品か。Fig.40-250~252,254,255もSC07出土だが弥生前期~後期前半の土器で混入品。やはり須玖I式が目立つ。Fig.41-257~261はSC13出土土器。257,258,261が時期を示し、A系壺が完全に丸底であり、II A期以降。主柱穴のSK13出土のFig.44-277,281~284も矛盾しない時期かそれ以前の弥生終末のもの。277はB系統の作りの手焙形土器の櫻部の可能性がある(Ph.78)。Fig.42-429はSC15出土の壺A。胴部が張らない鉢状の壺でI A期か。Fig.43-262のSK03出土のA系壺は、頭部突帯が扁平で痕跡的であり古墳初頭(II A~B期)であろう。Fig.44-276,278,279はSK01中層以下(SC01主柱

(Fig.53)

Ph. 89 SC07出土鉄錆

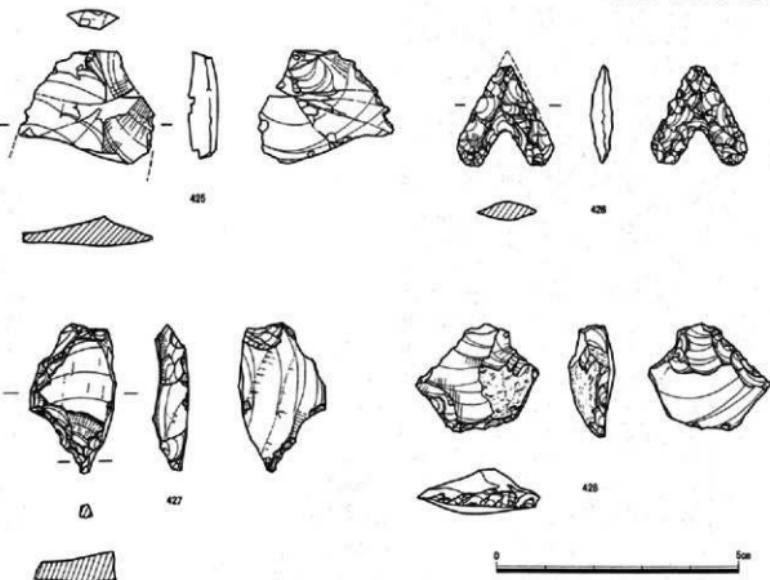


Fig. 52 那珂遺跡群73次出土調片石器(S=1/1)

穴)出土だが、いずれも弥生終末でよい。285は手すくね土器だが類例不明。

Fig.43-265~275はSE06出土。265の備前焼の小型の片口瓶は備前焼IV期で15世紀。267は白磁IX類。268~270は龍泉窯系青磁で、268は碗III類、269は碗IVないしV類(博多分類)、270は壺IIIないしIV類。この他にV類の碗がある(先述)。一部古いものを含むが、14世紀後半~15世紀の陶磁器。Fig.44-287,289はSK16出土。289は龍泉窯系青磁碗II-b類。13~14世紀。Fig.44-290~294はSK10出土。全て近世の肥前陶磁で18世紀後半か。Fig.44-436, Fig.45はSX01出土の陶磁器。436,424,297は龍泉窯系青磁の碗IV類とみられ、296は同じく龍泉窯で博多分類III類の盤または壺である。298は白磁だが、かなり内湾する体部でB類またはC類に類似する形態。以上からSX01は14世紀中頃であろう。

Fig.46-333~338, Fig.47-339~351はSD02出土で、多くは須恵器IV期新相~V期に併行。下層出土の342,343はIII期~IV期前半に併行するものか。Fig.47-352~357,363,366,368はSD02出土だが本来は中央住居群に伴うものと推定される。356,366は筑前型庄内壺(壺C)、363は壺Cないし最古相の壺D、367は小片だが胎土から山陰系の収入品の可能性がある。354はC系の鉢ないし長頸壺か。353はC系二重口縁壺の底部と推定される。364は韓半島系の三韓時代の瓦質土器。繩文の特徴は古式だが、器壁の厚さは新相で時期を決め難い。弥生後期に併行するもの。358~362の弥生中期土器や、365,368の弥生前期前半の土器があることも注目される。

Fig.48はSD05出土の遺物。369は龍泉窯系青磁の碗I~4類。370は白磁碗B類に類似する形態の白磁小碗。14世紀か。371は龍泉窯系青磁とするが底部高台の形態や釉薬からベトナム陶磁器の可能性もある。387は土師器の火舍(火鉢)。13世紀末以降。SD05は古いものも含むが、14世紀初頭前後か。

Fig.51には石器・石製品を図示した。406,407の石包丁は弥生中期から後期前半のものか。407は立岩産であろう。408,409,411,412は弥生前期から中期の石斧である。Fig.53(Ph.89)はSC07掘方出土の鐵製穂擣鎌である。木質がわずかに残存する。住居の時期(弥生終末)に伴ってよい。Fig.61にはその他の金属製品を図示した。435は薄板状の銅製品だが器種不明である。片面に布痕らしきものがある。

Fig.54~60にはSE01の井戸枠部材を図示した。部材は100点前後あり、時間の都合上約1/4の図化となった。なお、写真は全て撮影済みである。ただしこれも紙幅の都合上一部しか掲載できなかつた(Ph.90~95)。井戸枠部材については詳細を記述する余裕を持たないが、Tab.1も参照されたい。

Fig.52には剥片石器類を図示した(以下、剥片石器についての記述は吉留秀敏による)。那珂73次調査では少量の剥片石器類が出土したが、いずれも本来の遺構や包含層を逆離し、新しい時期の遺構などに混入したものである。しかし、本地域の人類活動や遺跡形成を知る手がかりとなるものである。石器には黒曜石製石器と剥片などがある。ここではそのうち、代表的遺物のみを報告する。

425は黒曜石製の剥片である。中央住居群ないしSD02の検出時上面で出土した。調査時に工具により破碎してしまい、各所を欠損している。石材は漆黒色黒曜石であり、剥片左側縁に自然面が残り、やや凹凸のあるアバタ状を呈する。肉眼では牟田産黒曜石に類似する。縦長剥片の基部であり、先端を大きく欠損するが、右端に古い折断面が僅かに認められる。表面の風化は進んでいるが、背面の左剥離面の風化は著しく、本剥片剥離以前の古い剥離面の可能性がある。平坦打面であり、背面に先行する剥離面1面がある。打角は120°ほどであり、打面、作業面調整はない。現存長2.3cm、幅2.8cm、厚さ0.6cmを測る。本剥片は風化状況、形態などから後期旧石器後半期の所産と考えられる。426は黒曜石製の石鏟である。SC05中央部で出土した。弱透明の黒色黒曜石を素材とする。差地は不明であるが、腰岳産黒曜石ではない。やや風化が進んでいる。一側縁を調査時に欠損するが、先端部は古い欠損(潰れ)である。二次調整は入念であり、両面に素材面を残さない。平面は正三角形にちかく、開脚部の抉りも同形をとる。

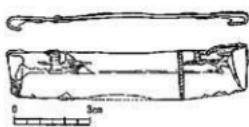


Fig. 53 SC07 出土鉄錐 (S=1/2)

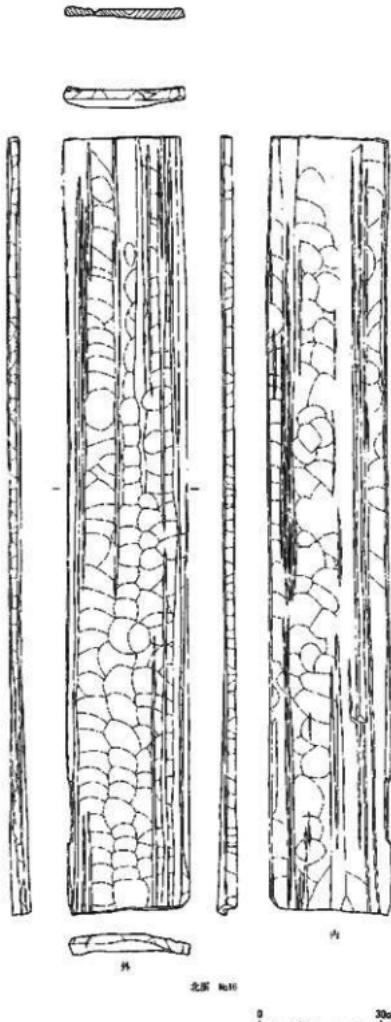


Fig. 55 SE01 井戸枠側板実測図 (S=1/12.5)

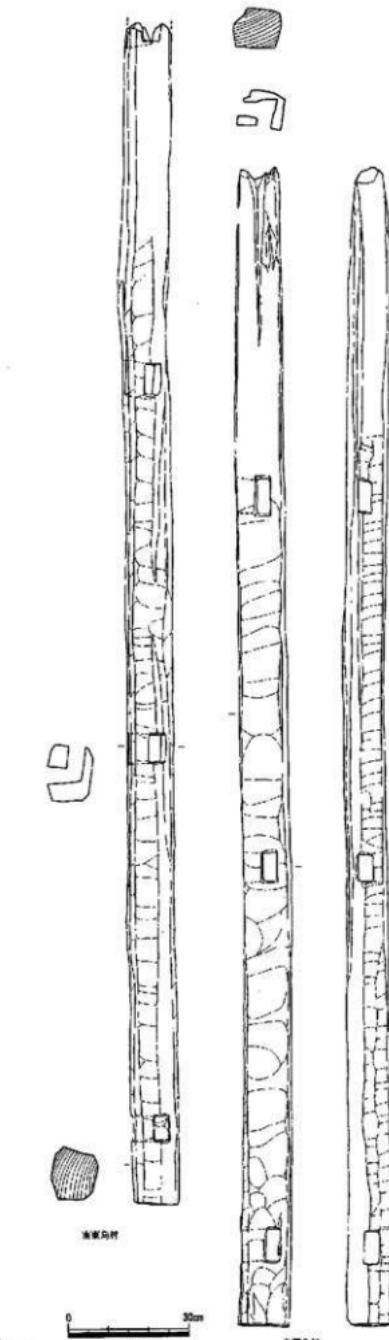


Fig. 54 SE01 井戸枠端柱実測図 (S=1/12.5)

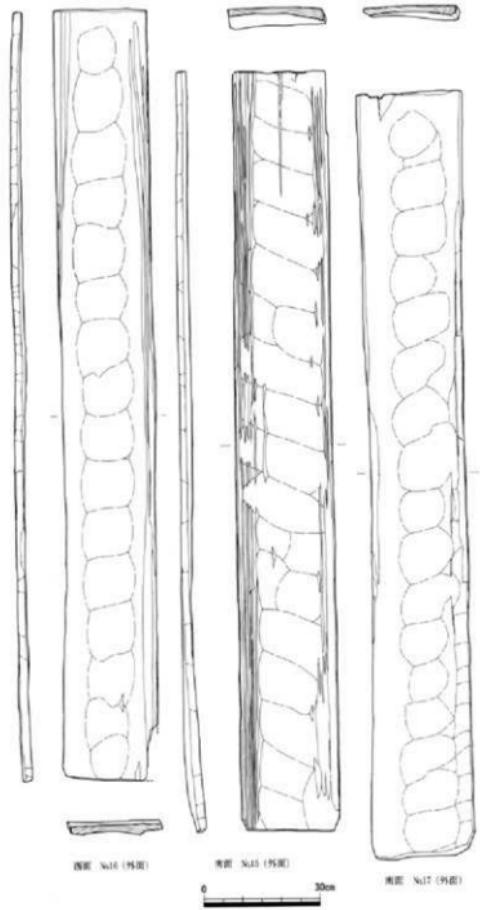


Fig. 56 SE01 井戸枠側板実測図(2) ( $S=1/12.5$ )

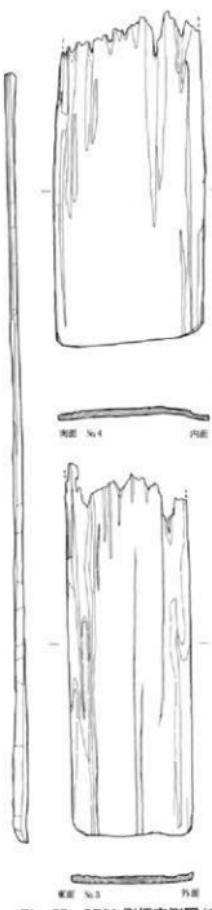
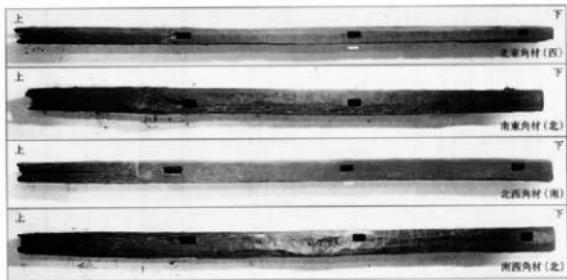
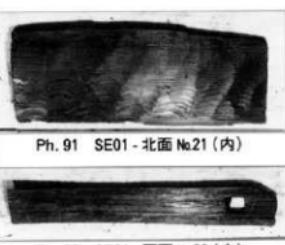


Fig. 57 SE01 側板実測図(3)  
( $S=1/12.5$ )



Ph. 90 SE01 井戸枠隅柱角材



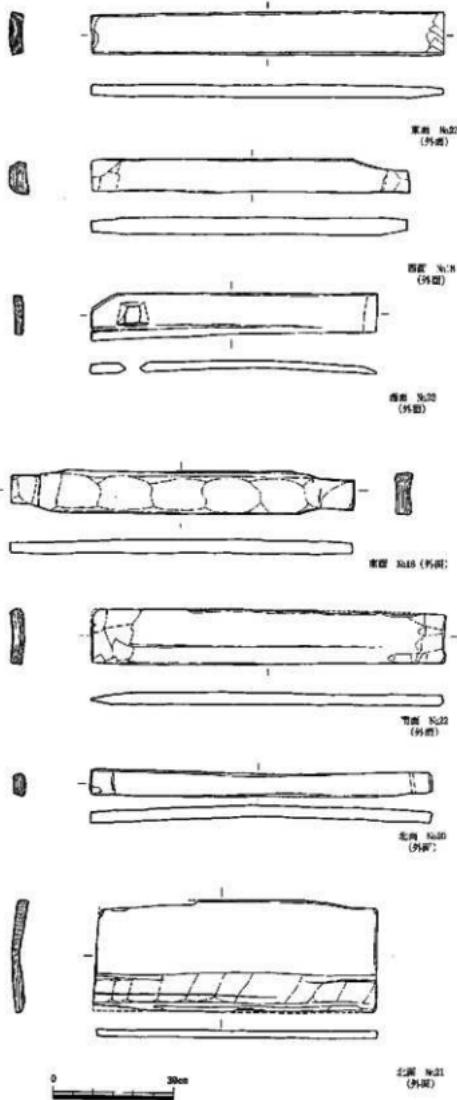


Fig. 58 SE01 井戸枠横棊実測図 (S=1/12.5)

脚端は丸みをもち、一端を研磨状に磨いている。現存長 2.1 cm、幅 2.0 cm、厚さ 0.4 cm を測り、先端部を復元すると長さ 2.4 cm 程となる。鍼形鎌の範疇に含まれ、そのやや新しい時期に所属しよう。縄文時代早期後葉（押型

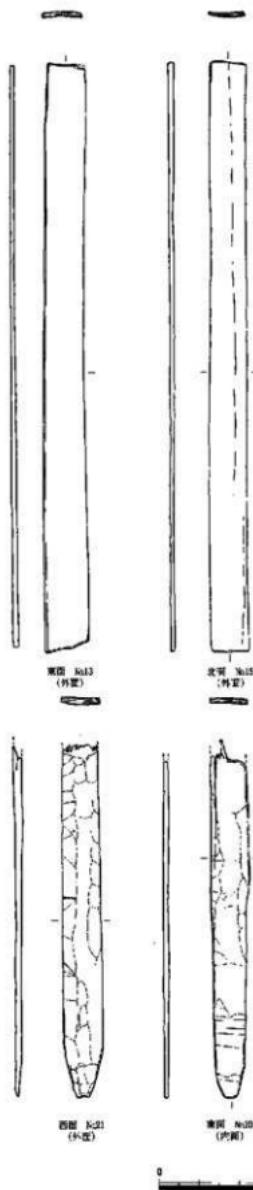


Fig. 59 SE01 井戸枠縦板・矢板実測図 (S=1/12.5)

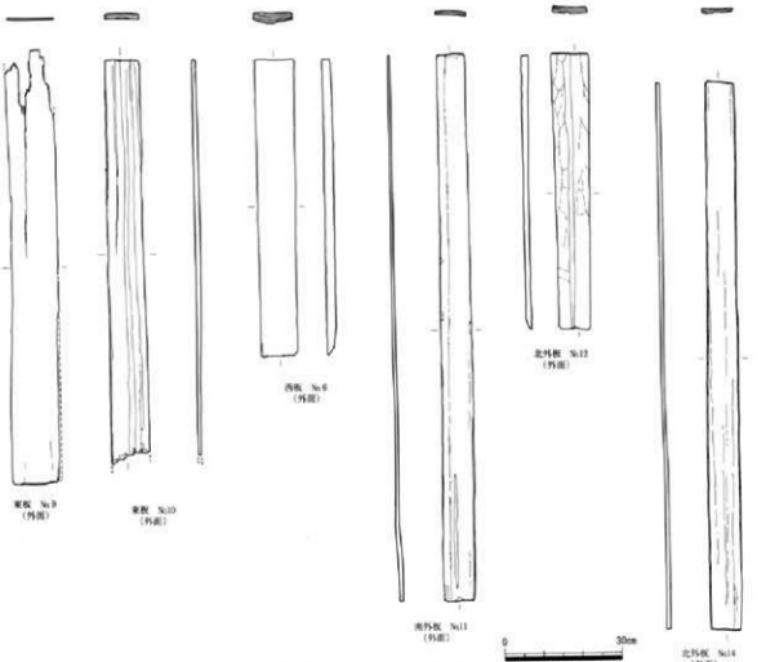


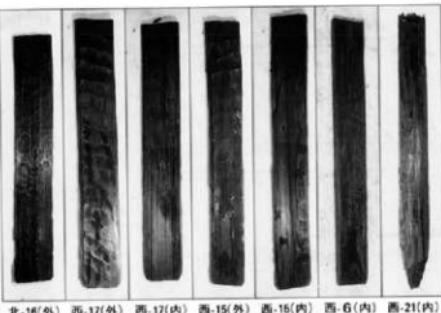
Fig. 60 SE01 井戸枠縦板実測図 ( $S=1/12.5$ )



Fig. 61 銅製品・鉄製品(捕獲) ( $S=2/3$ )



Ph. 93 SE01 井戸枠横板部材



Ph. 94 SE01 井戸枠縦板・矢板部材



Ph. 95  
SE01 東面-No 1 (内)

文土器新相～塞ノ神式土器段階)と推定される。427は黒曜石製の石錐である。SE01 挖方西側上層から出土した。石材は漆黒色黒曜石であり、風化は少ない。腰岳産黒曜石に類似する。横長の不定形剥片を素材とする。剥片の左端を錐部とし、打面部を折断後、全周に二次調整を施して整形している。外周の調整は直角に近く、表裏両面ともに石材の剥離面を残している。二次調整は全体に主剥離面からであるが、基部のみに背面側からの調整がみられる。錐部は断面台形であり、三方向からの剥離が見られる。体部：錐部の比率はおよそ5:1である。先端は尖らず欠損の可能性があるが、現状ではほぼ完形とみられる。長さ3.1cm、幅1.8cm、厚さ0.7cmを測る。428は黒曜石製の搔器である。SP152から出土した。石材は漆黒色黒曜石であり、風化は少ない。背面に角砾素材の自然面が残り、腰岳産黒曜石に類似する。縱長の不定形剥片を素材とする。剥片剥離の初期段階に剥出されたものである。二次調整は全体に主剥離面からであるが、基部左側に背面側からの調整がみられる。刃部は円刃というより、「く」字形となり、一部は直角に近い刃角を呈する。現存長2.2cm、幅2.5cm、厚さ0.8cmを測る。427,428は同様の石材を利用し、風化度合いをはじめ素材の形状や推定される剥片剥離、二次調整などに共通点が多い。本調査で他にも少量の黒曜石剥片類が出土しているが、この2点と同様の特徴をもつものが多く、同じ時期であろうと考えられる。同様の石器器種の類例は少ないが、比恵遺跡群24次、26次調査の弥生時代前期後半期の石器類と共通点があり、所属時期が近いものと推定される。

## V. おわりに

すでに紙幅も尽き調査を総括する余裕もないが、那珂73次調査では、旧石器時代末、縄文時代早期、弥生時代前期・中期・後期・終末期、古墳時代前期、古墳時代後期、飛鳥～奈良時代、11～16世紀の遺構と遺物を検出した。中世のSE01大型井戸が特筆されるが、弥生時代前期から古墳時代前期の遺物に途切れがないことや、飛鳥時代の溝や奈良時代の井戸も注目される。弥生・終末から古墳初頭は、特色ある搬入品を含む外來系土器がみられる。一方、在地(在来)系土器が多いのは那珂君体遺跡や東那珂遺跡の当時の水田に近く、比恵・那珂遺跡群の縁辺部に一般農民層が居住していたことと関係があるのかもしれない。また遺構の残存のあり方から、弥生時代終末期と13世紀頃にそれ以前の遺構を削平するような地形の改変(造成)があったと考えられる。最後に、報告書作成に関わった関係諸氏に感謝申し上げたい。

|        |                       |        |                                                   |
|--------|-----------------------|--------|---------------------------------------------------|
| 遺跡名    | 那珂遺跡群第73次調査           | 遺跡略号   | NAK-73                                            |
| 遺跡調査番号 | 9948                  | 分布地図番号 | 23-0085                                           |
| 調査地地籍  | 福岡市博多区那珂1丁目19-20-21番地 | 調査面積   | 383m <sup>2</sup>                                 |
| 開発面積   | 943m <sup>2</sup>     | 調査期間   | 1999(平成11)年11月8日～2000(平成12)年1月12日 事前審査番号 11-2-255 |

